有田・小田部39

福岡市埋蔵文化財調査報告書第784集

2004

福岡市教育委員会

有田・小田部39

福岡市埋蔵文化財調査報告書第784集

9929・9931・9967・0103・0213・0231

2004

福岡市教育委員会

序

福岡市教育委員会では、各種の開発によって失われていく遺跡について、記録保存のための発掘調査を実施しています。特に福岡市早良区にある有田遺跡群では、昭和42年の区画整理事業に伴う調査を嚆矢として、昭和50年代以降あらゆる開発に対応して発掘調査を実施してきました。平成13年度には調査次数も200次を超え、なお毎年調査次数を積み重ねております。

これらの発掘調査の結果、縄文時代中期の環状貯蔵穴群、弥生時代初頭の環溝や多くの弥生・古墳時代の住居跡、ミヤケ状の遺構や早良郡衙、戦国期の平城など市内でも屈指の遺跡であることが明らかになってきました。

今回報告するのは、これらの調査の中から国庫補助金で発掘調査しました専用住宅等建設に伴う発掘調査です。その内容は各報文にあるとおり、ミヤケ状遺構の一部などの他、貴重な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査の実施に多大な御協力を得ました各地権者の方には厚く感謝するとともに、本書が各方面で活用されましたら幸いです。

平成16年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　生田征生

例　　言

1　本書は福岡市教育委員会が専用住宅の建設に伴って、国庫補助金で平成11年度～14年度に実施した、福岡市早良区有田・小田部・南庄に所在する有田遺跡群第194次・第195次・第196次・第201次・第203次・第204調査地点の発掘調査報告書である。

2　本書に掲載した遺構実測図・遺物実測図、遺構写真撮影・遺物写真撮影・製図は下記のものが行った。

第194次　米倉　秀紀（調査担当）
第195次　米倉　秀紀（調査担当）・井上加代子
第196次　藏冨士　寛（調査担当）
第201次　藏冨士　寛（調査担当）
第203次　本田浩二郎（調査担当）
第204次　松浦一之介（調査担当）

3　本書に収録した所在地等の各調査地点のデータは、Ⅰ調査に至る経緯に収録している。

4　執筆はⅠ・Ⅱを米倉が、Ⅲ以降は各調査担当者が行った。

5　編集は米倉が行った。編集に当たっては、文体・章立て・用語等は統一を計らず、基本的には各担当者の原稿をそのまま掲載した。

6　本書に関するすべての資料は、本書刊行後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯と調査組織 ……1
　1　調査にいたる経過と各調査の概要 ……1
　2　各年度の調査組織 ……2
Ⅱ　有田遺跡群の立地 ……2
Ⅲ　第194次調査 ……5
　1　調査区の位置と周辺の既往の調査 ……5
　2　調査の記録 ……5
　3　まとめ ……11
Ⅳ　第195次調査 ……15
　1　調査区の位置と周辺の既往の調査 ……15
　2　調査の記録 ……16
　3　まとめ ……23
Ⅴ　第196次調査 ……29
　1　調査区の位置と周辺の既往の調査 ……29
　2　調査の記録 ……29
　3　まとめ ……29
Ⅵ　第201次調査 ……31
　1　はじめに ……31
　2　発掘調査の記録 ……31
　3　まとめ ……31
Ⅶ　第203次調査 ……33
　1　はじめに ……33
　2　発掘調査の記録 ……34
　3　まとめ ……45
Ⅷ　第204次調査 ……47
　1　調査区の位置と周辺の調査 ……47
　2　調査の記録 ……47

挿　図　目　次

図Ⅱ－1　有田遺跡群位置図 ……3
図Ⅱ－2　有田遺跡群調査地点位置図 ……4
図Ⅲ－1　第194次調査地点位置図及び同全体図 ……5
図Ⅲ－2　第194次調査SC01実測図及び同出土遺物実測図 ……6
図Ⅲ－3　第194次調査SC02実測図及び同竈・住居址内土坑実測図 ……7
図Ⅲ－4　第194次調査SC02出土遺物実測図１ ……9
図Ⅲ－5　第194次調査SC02出土遺物実測図２ ……10
図Ⅲ－6　第105次１号住居址と第194次SC02 ……11

図Ⅳ－１　第195次調査地点位置図 ……15
図Ⅳ－２　第195次調査遺構配置図 ……16
図Ⅳ－３　第195次調査SB04実測図 ……17
図Ⅳ－４　第195次調査SK03・SK06・SD01実測図・土層断面図 ……19
図Ⅳ－５　第195次調査SD01出土遺物実測図 ……20
図Ⅳ－６　第195次調査その他の出土遺物実測図 ……22
図Ⅳ－７　有田遺跡群３本柱柵建物群配置図 ……23
図Ⅴ－１　第196次調査地点位置図 ……29
図Ⅴ－２　第196次調査遺構配置図 ……29
図Ⅵ－１　第201次調査地点位置図 ……31
図Ⅵ－２　第201次調査遺構配置図 ……31
図Ⅶ－１　第203次調査区位置図 ……34
図Ⅶ－２　第203次調査遺構全体図 ……35
図Ⅶ－３　第203次調査SC38遺構実測図 ……37
図Ⅶ－４　第203次調査遺物実測図１ ……39
図Ⅶ－５　第203次調査SD01・SD02土層断面図 ……41
図Ⅶ－６　第203次調査遺物実測図２ ……42
図Ⅶ－７　第203次調査遺物実測図３ ……43
図Ⅶ－８　第203次調査遺物実測図４ ……44
図Ⅶ－９　第203次調査区位置図 ……46
図Ⅷ－１　第204次調査区と周辺の調査区位置図 ……47
図Ⅷ－２　第204次調査遺構配置図及び西壁土層断面図 ……48
図Ⅷ－３　第204次調査SD01出土遺物実測図 ……48

図版・写真目次

図版Ⅲ－１　第194次調査区全景・SC01竈 ……12
図版Ⅲ－２　第194次調査区SC01・02 ……13
図版Ⅲ－３　第194次調査区出土遺物 ……14
図版Ⅳ－１　第195次調査区全景 ……25
図版Ⅳ－２　第195次調査区SB04 ……26
図版Ⅳ－３　第195次SB04柱穴及びその他の遺構 …27
図版Ⅳ－４　第195次調査出土遺物 ……28
写真Ⅴ－１　第196次調査全景 ……30
写真Ⅵ－１　第201次調査全景 ……32
写真Ⅶ－１　第203次調査区東側遺構検出状況…35
写真Ⅶ－２　第203次調査区西側遺構検出状況…35
写真Ⅶ－３　第203次調査SC38完掘状況 ……36
写真Ⅶ－４　第203次調査SC38調査状況 ……36
写真Ⅶ－５　第203次調査SC38北側土層断面 …36
写真Ⅶ－６　第203次調査SC38土層堆積状況 …36
写真Ⅶ－７　第203次調査SC38調査状況 ……38
写真Ⅶ－８　第203次調査SC38土層断面 ……38
写真Ⅶ－９　第203次調査SC38遺物出土状況 …38
写真Ⅶ－10　第203次調査SC38内土坑土層断面 …38
写真Ⅶ－11　第203次調査SD01完掘状況 ……40
写真Ⅶ－12　第203次調査SD01・02土層断面 …40
写真Ⅶ－13　第203次調査SD01・02土層断面 …40
写真Ⅶ－14　第203次調査SD01・02土層断面 …40
写真Ⅶ－15　第203次調査区表土掘削状況 ……46
写真Ⅶ－16　第203次調査調査終了後 ……46
写真Ⅷ－１　第204次調査区西壁土層 ……48
写真Ⅷ－２　第204次調査北半調査区全景 ……48

Ⅰ 調査に至る経緯と調査組織

1　調査に至る経緯と各調査の概要

福岡市教育委員会では、市域の建築確認申請・開発計画のうち、遺跡内に含まれるものについては、事前に試掘等で遺跡の有無の確認を行い、建物の基礎等によって地下の遺構に影響が及ぶ場合は、記録保存のための発掘調査を実施している。特に早良区有田・小田部・南庄一帯にある有田遺跡群においては、昭和50年代以降は市内の重点地区として、極めて軽微な開発でも発掘調査を実施しており、2003年12月現在で、その調査次数は207次を数える。今回報告する遺跡は、有田遺跡群において専用住宅等の建設工事に先だって行った、平成12年度～15年度における国庫補助金による発掘調査の報告である。いずれも200㎡以下の小さな発掘であるが、これらの積み重ねが大きな成果をあげている。

第194次調査

調査番号	9929	遺跡略号	ART194	分布地図番号	81室見	調査期間	1999.7.27～1999.8.12	
所　在　地	早良区南庄３丁目181				敷地面積	244㎡	調査面積	78㎡
遺跡の概要	弥生時代・古墳時代の住居址 各１							

第195次調査

調査番号	9931	遺跡略号	ART195	分布地図番号	81室見	調査期間	1999.7.27～1999.8.12	
所　在　地	早良区小田部５丁目16-3				敷地面積	182㎡	調査面積	131㎡
遺跡の概要	弥生時代の木棺墓１・飛鳥時代の掘立柱建物１・中世の溝１・甕棺片							

第196次調査

調査番号	9967	遺跡略号	ART196	分布地図番号	82原	調査期間	2000.2.4～2000.2.12	
所　在　地	早良区小田部３丁目16・17-2				敷地面積	99㎡	調査面積	66㎡
遺跡の概要	時期不明ピット群							

第201次調査

調査番号	0103	遺跡略号	ART201	分布地図番号	82原	調査期間	2001.4.9～2001.4.11	
所　在　地	早良区小田部１丁目16-2				敷地面積	201㎡	調査面積	106㎡
遺跡の概要	時期不明ピット群							

第203次調査

調査番号	0213	遺跡略号	ART203	分布地図番号	82原	調査期間	2002.5.7～2002.5.27	
所　在　地	早良区小田部５丁目82-1、82-2				敷地面積	341㎡	調査面積	119.4㎡
遺跡の概要	古墳時代の住居址１・弥生時代の土抗１							

第204次調査

調査番号	0231	遺跡略号	ART204	分布地図番号	82原	調査期間	2002.8.19～2002.8.24	
所　在　地	早良区有田１丁目25-13、12				敷地面積	222㎡	調査面積	73.5㎡
遺跡の概要	中世の溝１							

2　各年度の調査組織

発掘調査は平成11～14年度、整理・報告は平成15年度に行った。各年度とも調査主体は福岡市教育委員会で、調査は文化財部埋蔵文化財課、調査庶務は文化財部文化財整備課が行った。各年度の調査組織は下記のとおりである。

平成11年度（第194・195次・196次調査）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長	山崎純男
調査第１係長	山口譲治
調査担当	米倉秀紀（第194・195次）・藏冨士寛（第196次）
文化財整備課長	柳田純孝
庶務担当	宮川英彦

平成12年度（第201次調査）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長	山崎純男
調査第１係長	山口譲治
調査担当	藏冨士寛
文化財整備課長	上村忠明
庶務担当	川村浩旭

平成14年度（第203・204次調査）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長	山崎純男
調査第２係長	田中壽夫
調査担当	本田浩二郎（第203次）・松浦一之介（第204次）
文化財整備課長	平原豪
庶務担当	川村浩旭・御手洗渚

平成15年度（整理・報告）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長	山崎純男
調査第１係長	力武卓治
文化財整備課長	平原豪
庶務担当	後藤泰子

Ⅱ　有田遺跡群の立地

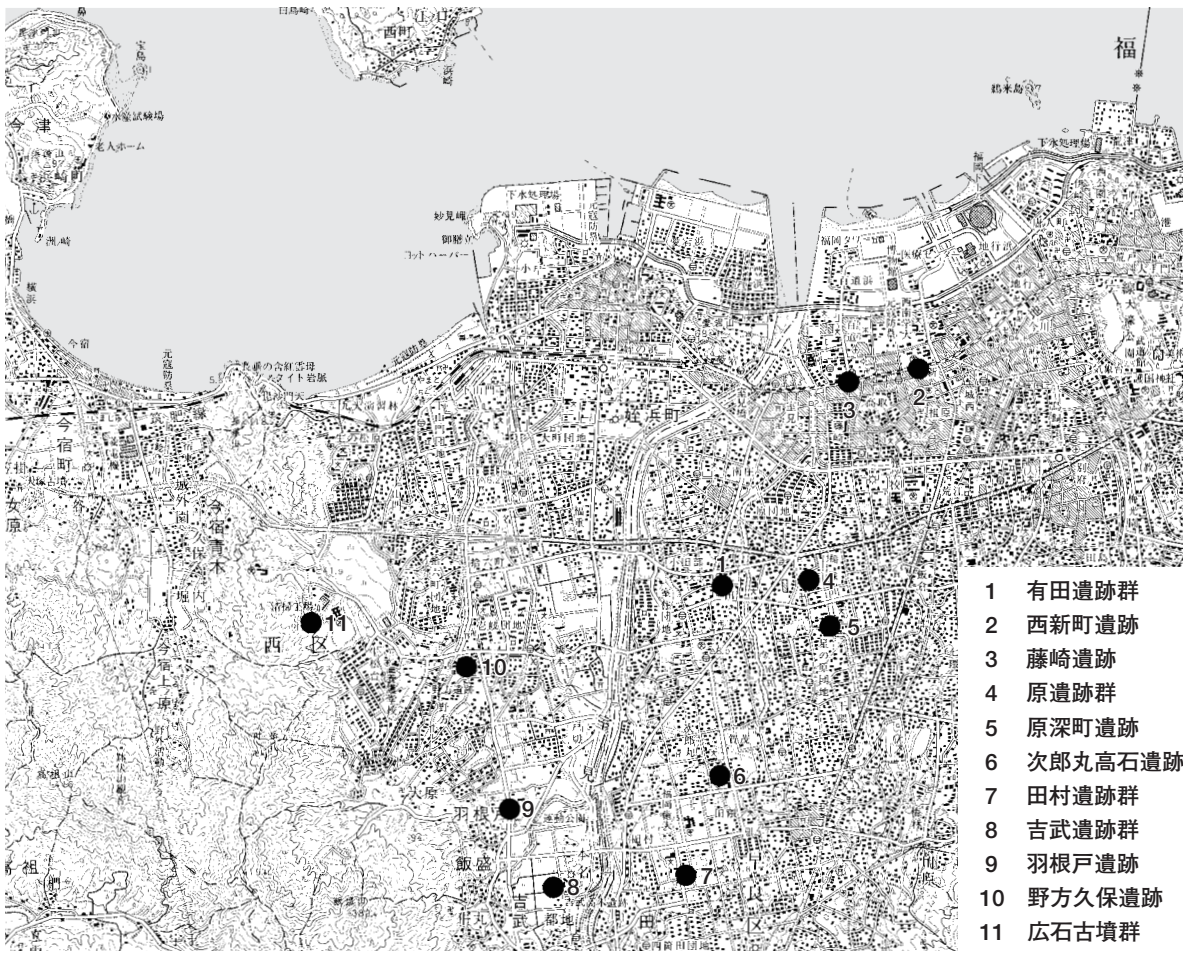
有田遺跡群は福岡市中央部西側に広がる早良平野北部にあり、行政区画では早良区有田・小田部・南庄に位置する。旧郡名は早良郡に属する。遺跡は独立した洪積台地上にあり、西に室見川、東に金屑川が流れている。台地は南から北に広がり、中央から北側は多くの谷が北から南に入り込み、全体として八ツ手状の形を成している。地質的には砂礫台地Ⅱに属し、八女粘土の上部に鳥栖ローム・新期ロームが堆積しているが、昭和40年代前半の区画整理事業の際に多くの地点で大規模な削平を受けている。現在は台地北端部から海までの距離は1.5km程あるが、往時は室見川河口が大きく湾入していたと考えられる。

有田遺跡群は旧石器時代から現代まで続く遺跡で、その主なものを列挙すると、旧石器時代はナイフ形石器・三稜ポイント・細石器など各期の遺物、縄文時代は環状に巡る中期から後期前半の貯蔵穴

群がある。弥生時代は前期の環溝が台地最高所で、前・中期の住居址群は台地各所から、細形銅戈を伴った金海式甕棺は台地の南側、後漢鏡を伴った立岩式甕棺などの甕棺群・木棺墓群は主に台地の北側から発見されている。古墳時代は台地全域に住居址群があり、台地北端部には円墳３基・方形周溝墓１基・円形周溝墓９基などの墓がある。また５世紀代には多くの陶質土器が出土しているのが特徴的である。さらに古墳時代末から飛鳥時代には、台地各所の８ヶ所にミヤケ状の遺構があり、奈良時代には早良郡衙が台地最高所に築かれている。中世後半期には、台地最北部と台地中央部、台地最北部に溝に囲まれた館があり、16世紀頃には台地最高所に大規模な平城が築かれている。18世紀代には門構えを持つ建物群が見つかっており、庄屋もしくは大庄屋の館と考えられる。

以上を見ると、いずれの時期においても、早良平野の拠点集落もしくは支配拠点としての位置を占めており、早良平野のみならず、福岡周辺を見ても、これほど時期的に複合する遺跡は多くはなく、その重要性が窺える。

有田遺跡のある早良平野を見ても、日本最古の王墓として有名な吉武高木遺跡、方形周溝墓から三角縁二神二車馬鏡や三角縁竜虎鏡が出土した藤崎遺跡、古式の人物埴輪をもつ80m級の前方後円墳である拝塚古墳など、比較的有名な遺跡は多いものの、弥生時代・古墳時代から戦国期に至るまで、平野を超えた支配者が出ていない。これは平野の面積が狭く、常に福岡平野・糸島平野の権力にかなわなかったためであろうか。



図Ⅱ－１　有田遺跡群位置図（１/70,000）

図Ⅱ－２　有田遺跡群調査地点位置図（１/8,000）

Ⅲ　第194次調査

1　調査区の位置と周辺の既往の調査

第194次調査は有田遺跡の北端部近くの早良区南庄３丁目181に所在し、八つ手状に伸びる最も北の細い台地上に立地している。周辺での調査は主に古墳時代の墳墓が検出されており、第85次・89次・178次・202次調査では古墳時代前期～中期の方形周溝墓・円形周溝墓が10基以上検出されている。さらに甕棺墓や時期不明の木棺墓・箱式石棺墓などが見つかっている。他には旧石器時代遺物、弥生時代中期の円形住居などが検出されているが、有田遺跡の各所にある古墳時代の住居はほとんどなく、台地最北部の当調査区周辺では、おおむね弥生時代は生活区域、古墳時代は墳墓区域として利用されており、古墳時代は当調査区あたりがその境界になっている。

2　調査の記録

（１）調査の概要

発掘調査は平成11年７月27日に、重機による表土剥ぎから開始した。 表土の下は遺構面である橙色ロームで、表土の厚さは約30㎝であった。調査区内は攪乱が激しく、特に北側と西側に、一見波板状遺構のように連続する土坑群があるが、これらにはガラス・近代陶磁器等が入っている。検出した遺構は弥生時代の住居１軒、古墳時代の住居１軒とピット群である。出土した遺物は整理後で高さ10㎝のコンテナ箱であった。調査は盛夏期にしては異例の雨に悩まされながら、８月12日に終了した。

図Ⅲ－１　第194次調査地点位置図（１/1,000）及び同全体図（１/100）

（２）遺構と遺物

①　竪穴住居

SC01（図Ⅲ－１、図版Ⅲ－１）

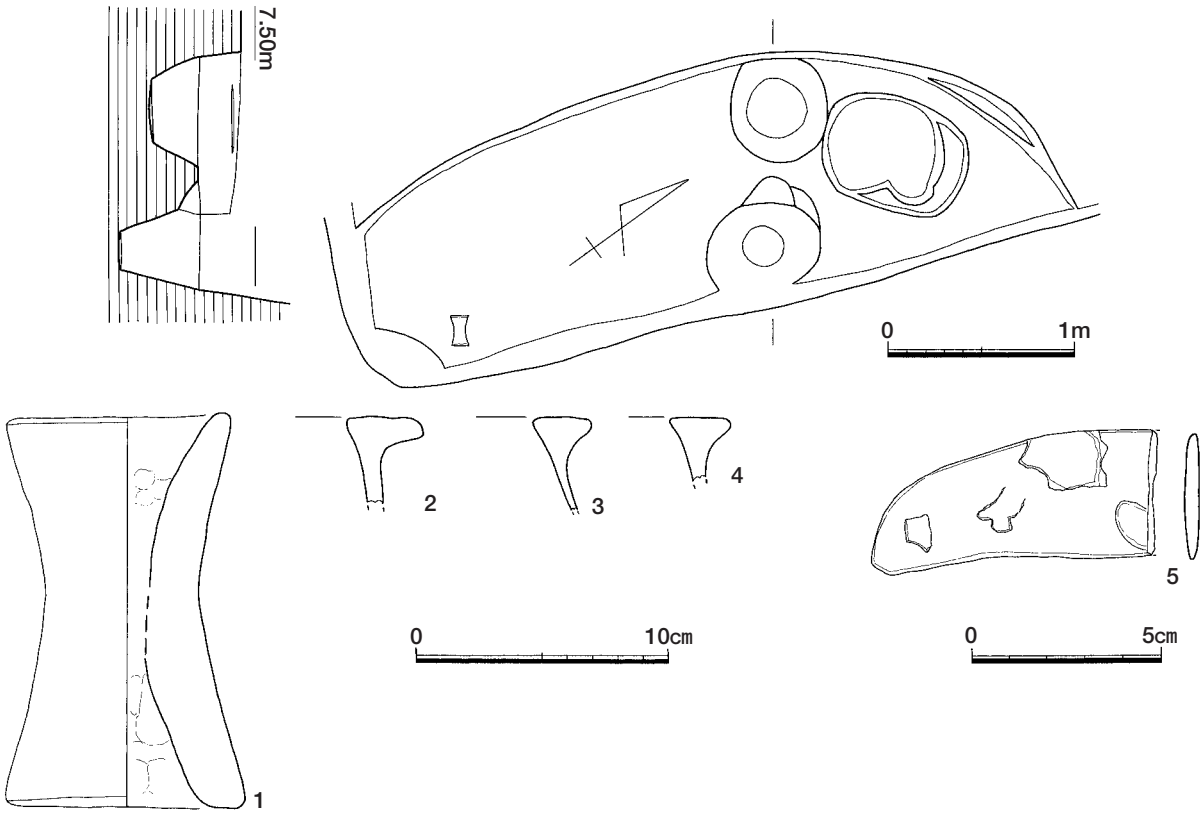
調査区南東隅で検出した、弥生時代の円形住居である。大半は調査区外に伸びている。検出部分は3.76m×1.20mで、壁面の高さは20㎝ほどである。検出部分は少ないが、正円形にはならず、第178次調査で検出したような小判形を呈すると思われる。ピットはいくつか見つかっているが、どれが住居に伴うものかどうかよくわからない。炉は未検出である。住居床面近くから完形の器台が１点出土した他はすべて細片で、総量も少なく、全部でコンテナ１箱に満たない。

出土遺物

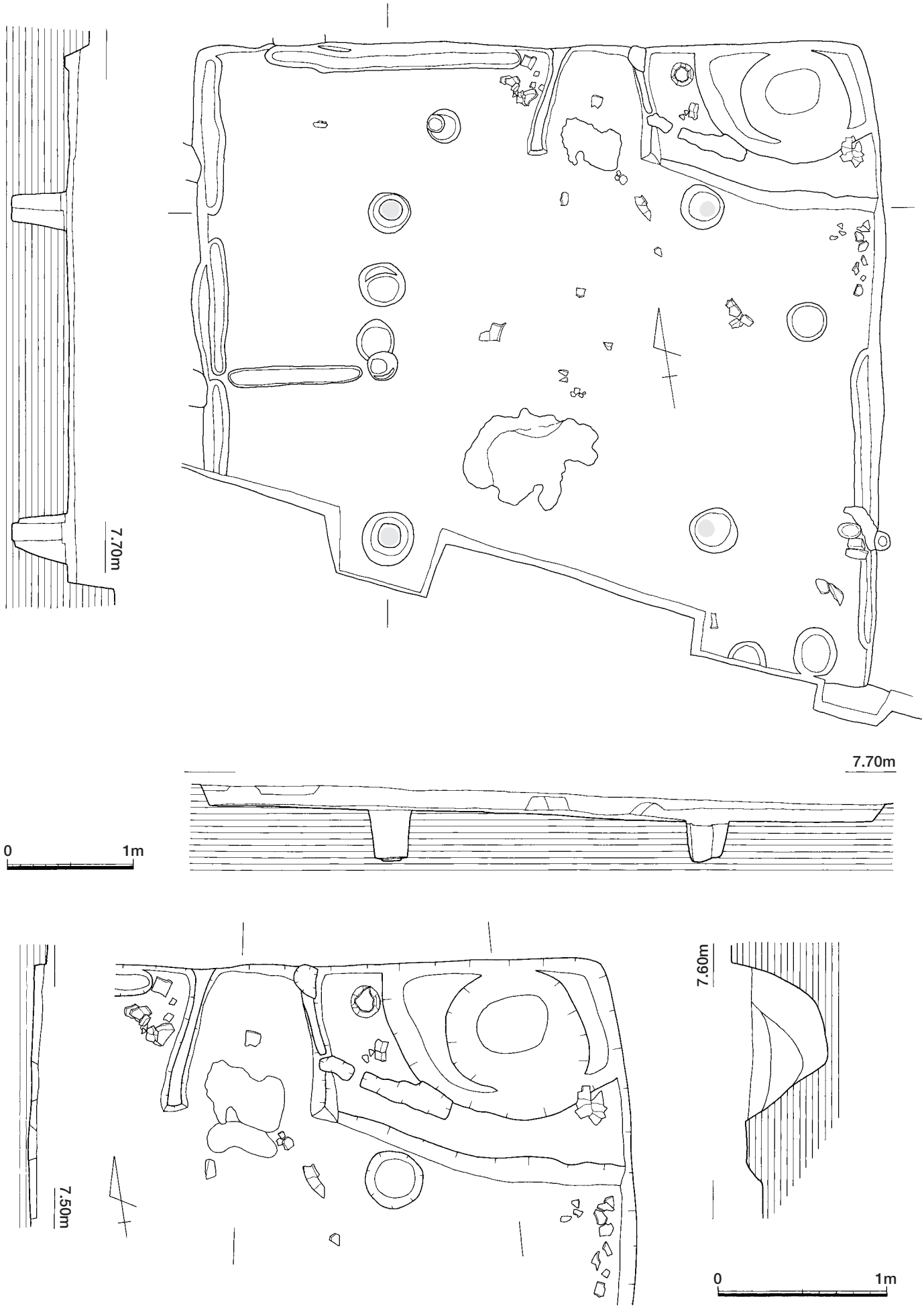
１は完形の弥生土器の器台である。口径8.9㎝、器高15.6㎝、脚径9.4㎝を測る。胎土には２～３㎜大の石英などを多く含み粗い。器壁は厚く、重い。表面はナデ調整で、内面はしぼった後に指でなでている。２～４は弥生土器の口縁部片である。いずれも鋤先口縁であるが、口縁部の形態や胴部の厚みなどが異なっている。色調はいずれも橙色で、石英などをやや多く含んでいる。４には金雲母も少量確認できる。５は堆積岩製の石鎌である。刃部は丸みを帯び、摩滅が激しい。現存長7.5㎝、幅3.4㎝、厚さ3.5㎜を測る。

SC02（図Ⅲ－２、図版Ⅲ－２）

調査区南端で検出した。南壁は調査区外であるが、略方形のプランと思われ、中央部分で東西壁間約5.36mを測る。壁高は10～15㎝遺存している。主柱穴は４本で、柱穴径35㎝前後、柱径15㎝前後、深さ40㎝前後を測る。住居内の地山面は西から東へ高さ10㎝程傾斜しており、張り床があった可能性があるが、明確ではなかった。壁沿いには、幅15㎝、床面からの深さ５㎝前後の壁溝が一部を除いて巡っている。また西壁中央付近から住居の中央に向かって長さ１mほど同様の溝が伸びている。北壁



図Ⅲ－２　第194次調査SC01実測図（１/40）及び同出土遺物実測図（１/３、１/２）



図Ⅲ－３　第194次調査SC02実測図（１/50）及び同竈・住居址内土坑実測図（１/30）

中央やや東側に竈が築かれている。竈は両壁の下部のみが遺存しており、ロームが若干混じった白色粘土で築かれている。中央の燃焼部分には固い焼土があった。竈の東側、住居の東北コーナー部分は、土坑が掘られている。土坑は住居の壁に沿って作られ、埋土の状況からも住居に伴うものである。土坑は歪んだ平面形で、約1.2m×1.0mを測る。住居床面からの深さ約30㎝を測る。埋土の状況からは一度埋めた、もしくは埋まった後に、再度南側を堀り直したものと思われる。土坑の周囲は住居床面より10㎝程高く造り出している。

住居中央やや南側には１m×80㎝の範囲内に白色粘土の塊があった。粘土は最も厚いところで約10㎝の厚みがあった。ただし白色粘土は10㎝の厚さの上部５㎝のみで、下部５㎝は焼土粒を混じえた黒褐色粘質土である。この範囲内西側の住居床面近くから鞴羽口１点が出土した。この時点は付近の土を水洗するべきであったが、すでにほとんど掘り終わり、どこに捨てたか分からない状態であり、残ったわずかの部分からは炭化物等以外はなかった。なお、住居の東半分（詳細位置不明）から鉄滓１点が出土した。

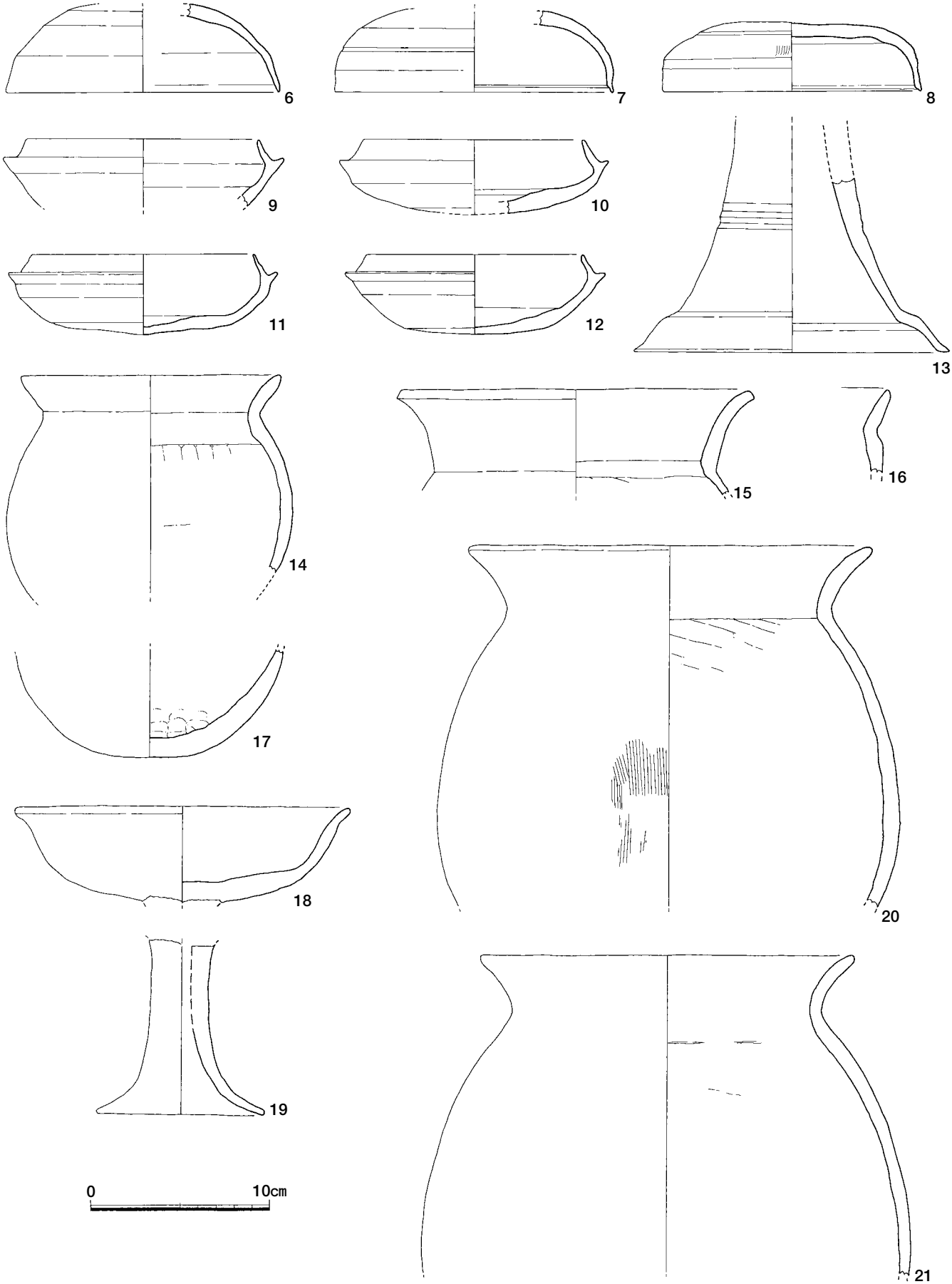
住居址内の各所からコンテナ４箱程の遺物が出土した。特に竈から土坑南壁にかけて多くの遺物が出土しているが、完形のものはない。

出土遺物

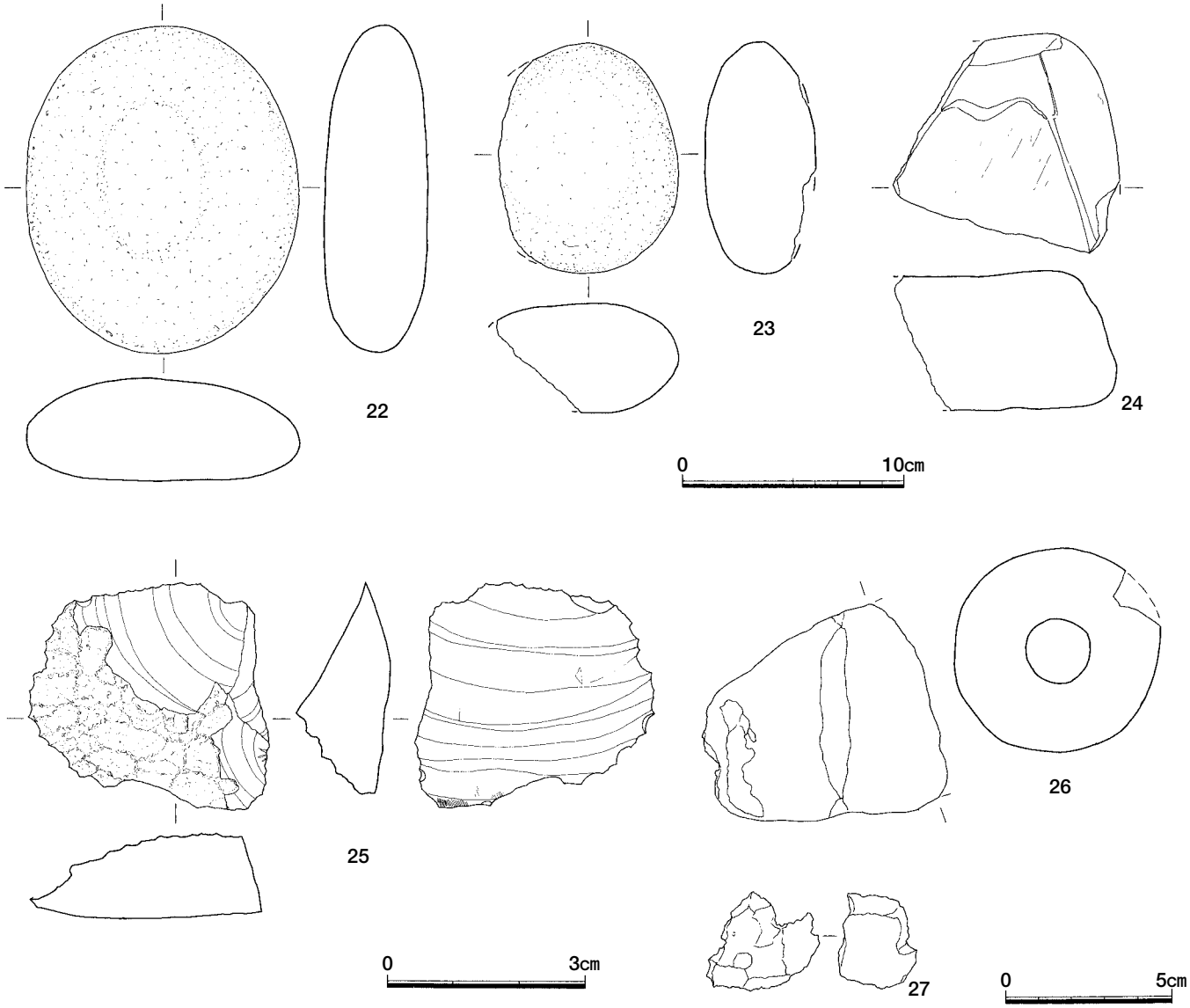
６～８は須恵器の坏蓋である。６は住居址西側上層から出土した。復元口径15.1㎝、器高５㎝前後を測る。口縁部がわずかに細くなる。天井部付近は外面ヘラケズリ、内面指ナデで、他は回転横ナデである。７は住居址東側から出土。復元口径15.4㎝、器高５㎝弱を測る。体部中央に沈線が巡り、口縁部内面は先細りして段がつく。外面は沈線より上部がヘラケズリ、他は横ナデである。８は竈のすぐ西側床面直上で出土。口径14.3㎝、器高3.9㎝を測る。体部外面中央に沈線気味に段がつく。体部内面先端にも段がつく。天井部は平坦である。外面沈線から上はヘラケズリ、後円部は指ナデ、内面は天井部が指ナデ、他は横ナデである。９～12は須恵器坏身である。いずれも胎土に砂粒を多く含み、色調は灰色から青灰色を呈している。９は復元口径12.9㎝、推定器高５㎝前後を測る。住居址北西隅で出土。内面及び体部外面に自然釉が付着している。外面はほぼヨコナデである。10は口径12.2㎝、器高４～4.2㎝を測る。底部はヘラケズリで、他はヨコナデである。最上層で出土。11は復元口径12.3㎝、器高4.5㎝を測る。最上層から出土。底部外面はヘラケズリ、同内面はナデ、他はヨコナデである。12は口径12㎝、器高4.35㎝を測る。最上層から出土。底部内面には同心円文が残る。同外面はヘラケズリである。13は須恵器高坏で、住居北東隅土坑のすぐ南側の一段高い部分と土坑内及びその周辺の下層から出土した。復元脚径14.5㎝を測る。

14～21は土師器である。14は甕で、口径14.4㎝を測る。住居東側下層出土。摩滅がひどく調整は不明瞭だが、ナデであろうか。15も甕で、復元口径19.7㎝を測る。竈南側下層で出土した。外面ナデ、内面ヘラケズリである。16は小壺か。頸部外面は指で1周削り取り、沈線状にしている。竈内下層出土。17は甕の底部で、竈南側下層出土。全面ナデ調整。18・19は高坏である。18は竈と土坑の間床面直上、19は竈内出土。18は口径18.5㎝を測り、体部下半外面は轆轤によるケズリ、他は轆轤によるナデで仕上げている。19は脚径9.4㎝を測る。筒部外面はナデ、内面はケズリ、脚部はヨコナデ調整を施している。18は黄色気味、19は赤色気味で色調が全く異なり、同一個体ではない。20・21は大型の甕である。20は復元口径22.4㎝、胴部最大径26.7㎝、推定器高28㎝前後を測る。竈内最上層と住居東側覆土から出土した。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。21は復元口径20.7㎝、胴部最大径27㎝を測る。20と異なり、頸部内面に稜がつかない。調整は摩滅のため不明である。

22～25は石器で、22・23は花崗岩製磨石である。表裏両面が使われ、側面はさほど使用されていな



図Ⅲ－４　第194次調査SC02出土遺物実測図１（１/３）



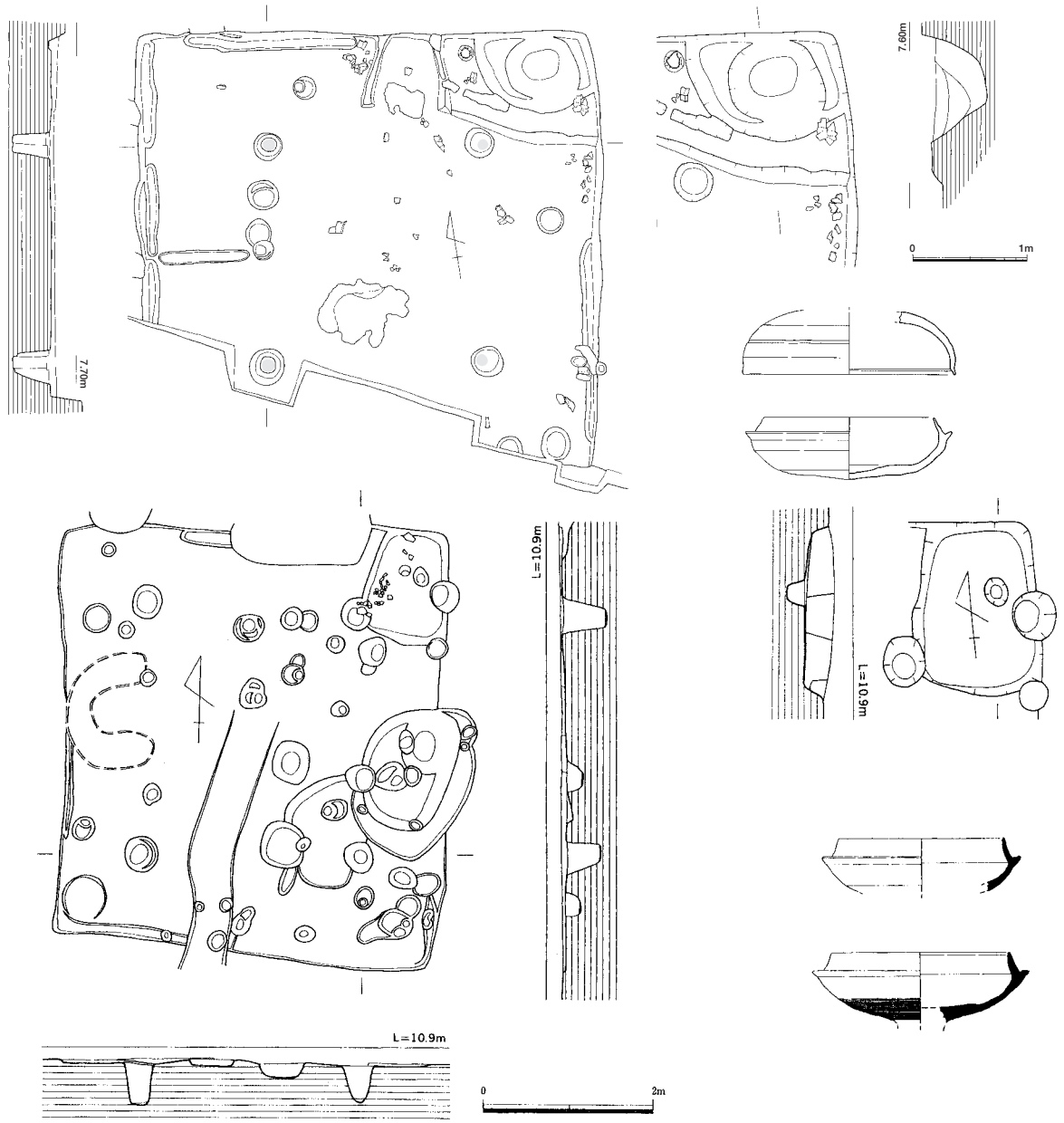
図Ⅲ－５　第194次調査SC02出土遺物実測図２（１/３、１/２、１/１）

い。22は長さ14.75㎝、幅12.2㎝、厚さ4.6㎝、重さ1,363gを測る。23は長さ10.4㎝、推定幅約９㎝、厚さ５㎝、重さ520gを測る。24は破片であるが、石皿と考えられる。表裏両面 に使用による摩滅が認められる。現存の大きさ10.2㎝×9.9㎝、厚さ6.1㎝を測る。25は黒曜石製の剥片である。片面に自然面を残す。やや灰色がかった黒色に茶色の筋が無数に走っている。パティナが古く、旧石器時代のものと考えられる。当調査地点北側では、旧石器時代の石器群が出土している。26は鞴の羽口である。住居内南側にある白色粘土内より出土した。炉体への取り付け部分で、取り付け角度は21°ほどになる。取り付け先端部分には鉄分がわずかに付着する。残存部の最大径は径約６㎝、孔径２㎝を測る。27は鉄滓である。鍛冶滓と思われる。大きさ3.4×2.9×2.4㎝、重さ23.5gを測る。

3　ま　と　め

当調査区で検出したのは、弥生時代の住居址１軒（SC01）と古墳時代の住居址１軒（SC02）のみで、しかも弥生時代住居址はその大半が調査区外であった。しかし古墳時代の住居はやや特異な構造をしている。すなわち、住居の片隅に10㎝ほど高い部分を１㎡ほど造り、そこに土坑を掘っているのである。住居の隅に土坑を設ける例は、有田遺跡群第105次調査の１号住居跡がある。105次調査のものは床面と同レベルに掘られており、若干構造が異なるものの、規模はほぼ同じであり、この土坑の周辺に土器の破片が多いことも共通する。時期的にはともに須恵器九州編年のⅢA期である。ただし土坑の目的はわからない。

またSC02では、住居の南側に炭や焼土のまとまりの上に白色粘土の塊があり、その部分の炭・焼土層内から羽口が出土した。当初、この粘土は竈を破壊した後に、遺棄したものであろうと考えていたため、注意深く掘らなかった。この粘土塊の東側から１点ではあるが、鉄滓が出土していることから、鍛冶工房である可能性も捨てきらないが、残念ながら住居覆土の水洗い等を行わなかったため、わからない。失敗であった。白色粘土の下には、炭や焼土粒が入った土があったものの、床面そのものは焼けておらず、竈以外に床面が焼けた部分はなく、鍛冶工房だとすると、竈が鍛冶炉として使われた可能性も考えなければならないかもしれないが、そういう例はあるのだろうか。



図Ⅲ－６　第105次１号住居址（下）と第194次SC02（上）（１/80）

第194次調査区全景（南から）

SC01竈（南から）

図版Ⅲ－１　第194次調査区全景・SC01竈

SC02内土抗土層断面

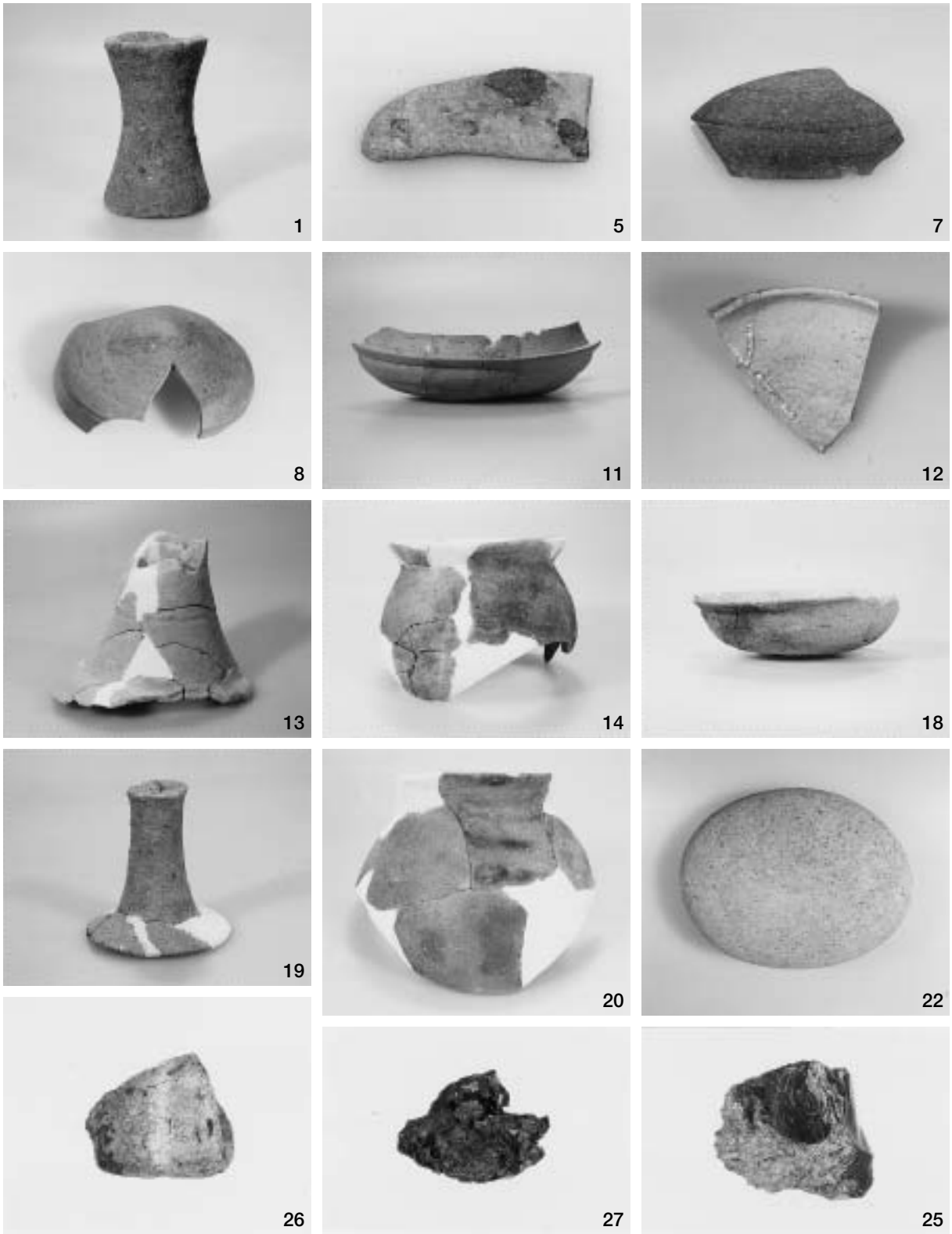
SC02内土抗（南から）

SC02内粘土・焼土ブロック

SC01遺物出土状況

SC01（南から）

図版Ⅲ－２　第194次調査SC01・02

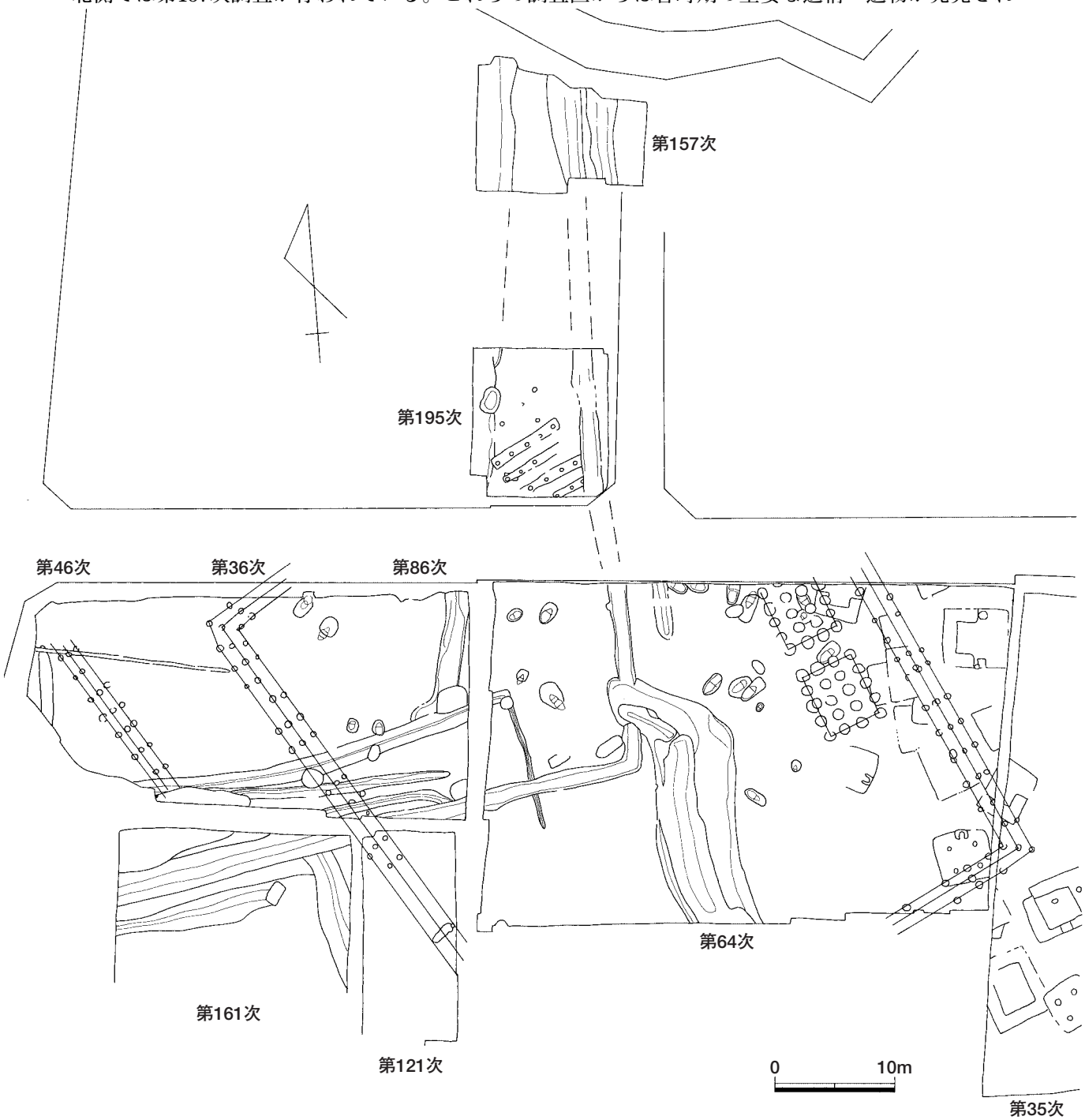


図版Ⅲ－3　第194次調査出土遺物

Ⅳ　第195次調査

1　調査区の位置と周辺の既往の調査

第195次調査は有田遺跡の北西端部近くの早良区小田部５丁目16-3に位置する。八つ手状に伸びる台地の北西部端、幅100mほどの南北に伸びる細長い台地上に立地している。北側へ30mの地点で約２m、西側へ50mの地点で約３mほど、急激に台地が落ちる。東側にも谷が入るが、谷部には古墳時代と考えられる整地層が認められる。それでも現況で台地部と東側の谷部の比高差は1.5mを測る。周辺での調査例は多く、道路を挟んだ南側の街区は第35次調査以下多くの調査を行い、１軒家を挟んだ北側では第157次調査が行われている。これらの調査区からは各時期の重要な遺構・遺物が発見され



図Ⅳ－１　第195次調査地点位置図（１/500）

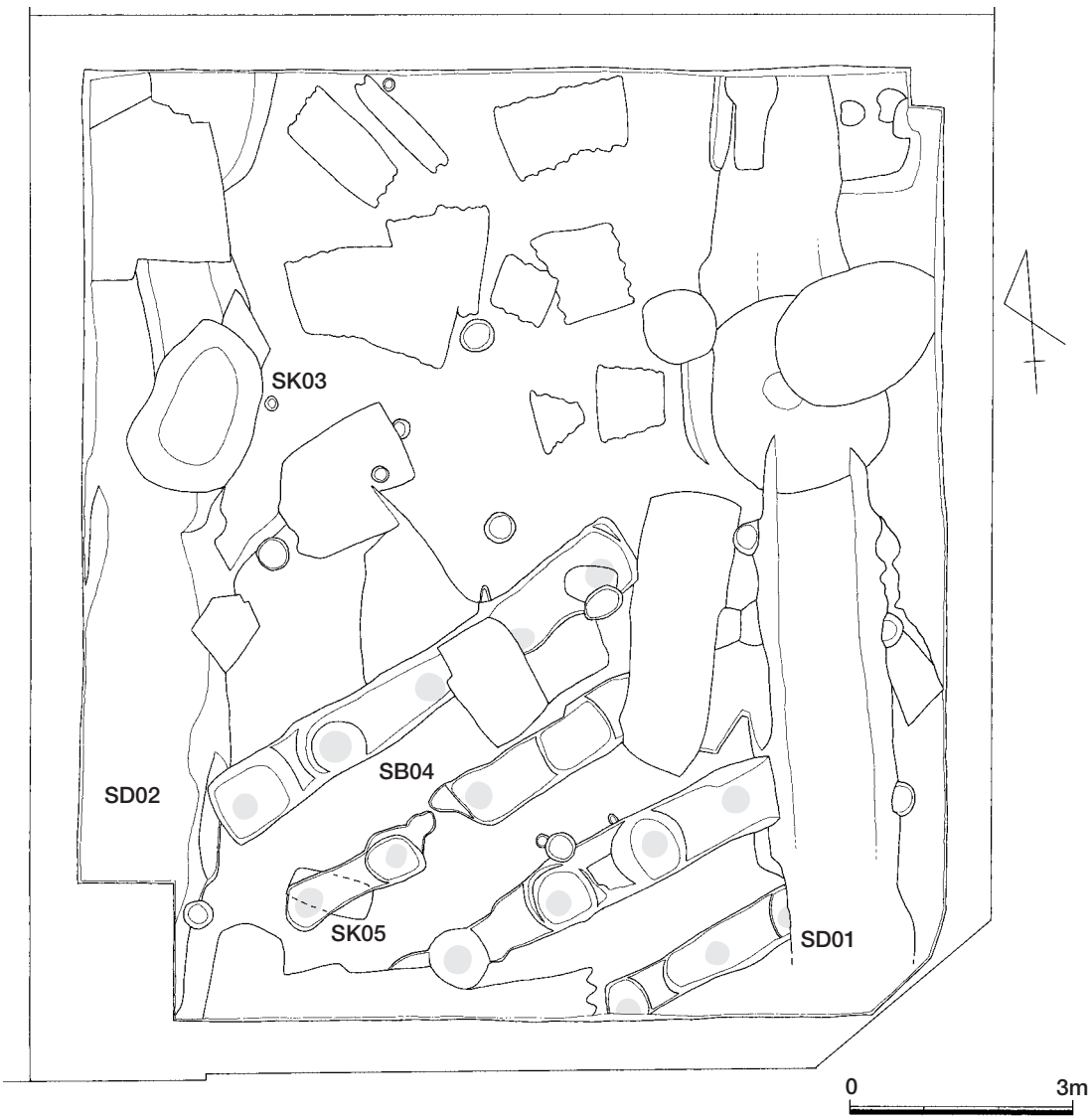
ている。弥生時代は甕棺群があり、第177次調査では後期初頭の甕棺内から前漢鏡１面、仿製鏡１面が出土している。古墳時代は、第35次区周辺で谷に向かった東側斜面を整地して、多くの竪穴住居を作っている。古墳時代末頃～飛鳥時代には、いわゆる３本柱柵に囲まれた倉庫群があり、ミヤケと考えられる。中世後半期には館を巡ると考えられる溝が検出されている。

２　調査の記録

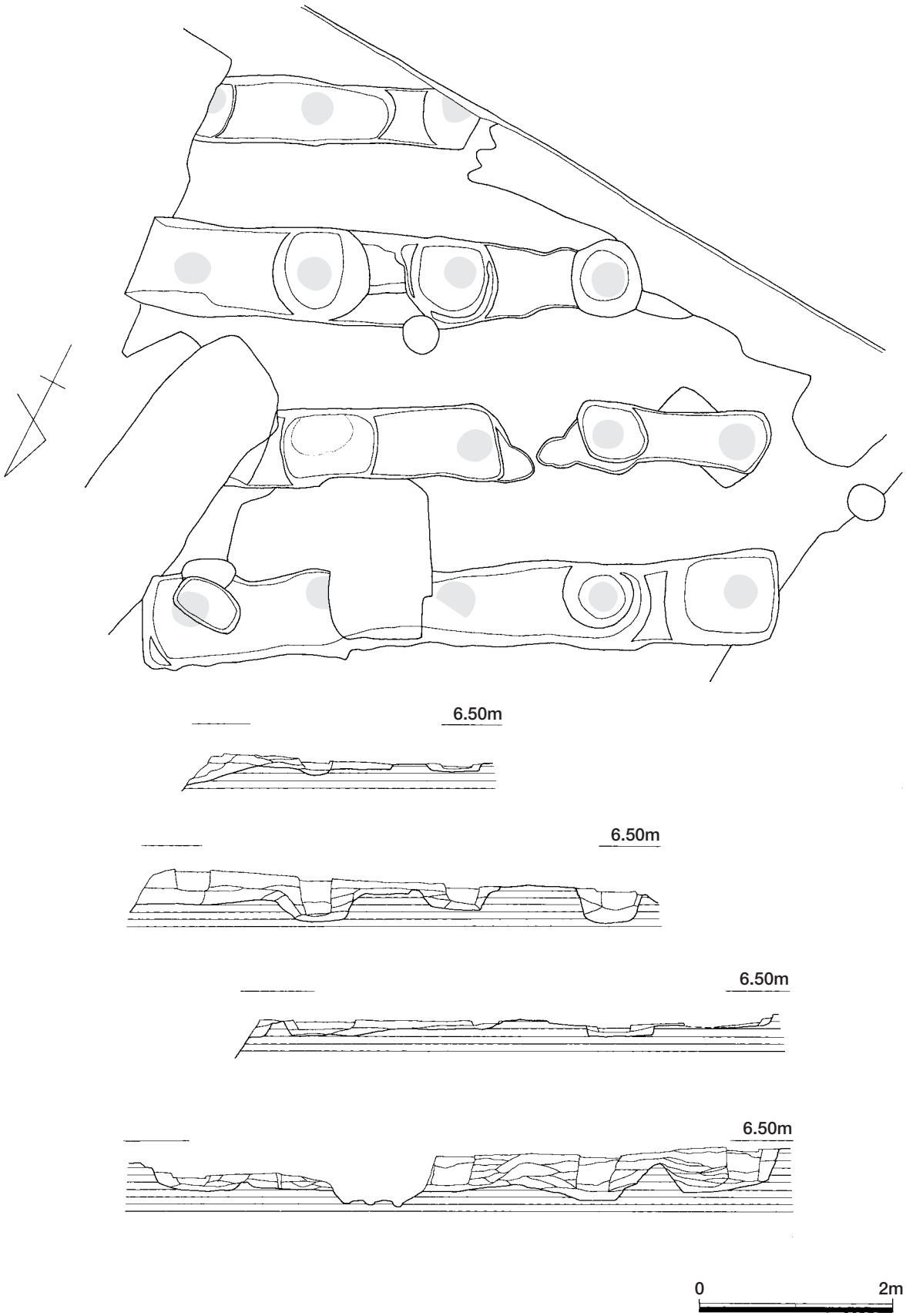
（１）調査の概要

発掘調査は平成11年８月23日に、重機による表土剥ぎから開始した。 廃土置き場の関係上、南側と北側に分けて調査した。厚さ10～20㎝の表土の下は遺構面である橙色ロームで、遺構の残り具合から遺構面はかなりの削平を受けていると考えられる。さらに建物解体時に遺構面をかなり傷つけており、随所に深さ20～50㎝の攪乱がある。検出した遺構は前述の古墳時代末～飛鳥時代頃と考えられる倉庫１棟、中世の溝２条、時期不明の土坑１基、弥生時代と考えられる木棺墓１基である。調査は同年９月15日に重機による埋め戻しで終了した。

なお、出土した遺物のうち、実測可能な遺物のほとんどがSD01からの出土遺物で、その他の遺構から出土した遺物は極めて少ないため、本報告では検出遺構を先に記述し、出土遺物は、その後にまとめて記述する。



図Ⅳ－２　第195次調査遺構配置図（１/100）



図Ⅳ－３　第195次調査SB04実測図（１/60）

（２）検出遺構

①　掘立柱建物

SB04（図Ⅳ－３、図版Ⅳ－２）

調査区南側で検出した桁行４間、梁間３間の総柱建物である。各桁は４本の布堀によって作られている。布堀の土層断面から築造過程を見ると、まず幅0.7～1.0m前後の溝を平行に４本掘る。さらに各溝の底に、柱を据える部分を長さ0.7～1.2m、深さ30㎝前後掘り下げる（柱穴）。次に柱穴の底に厚さ５㎝ほど粘土質の土を突き堅め、その上に柱を据える。その後、柱穴、布掘を順次埋めていくが、特に柱周辺は版築状に入念に突き固めている。布堀、柱穴ともに堀方の形は整然としておらず、床面も凹凸が激しく、かなり雑に掘りあげている印象を受けるが、有田遺跡の他地点や他遺跡の類例も同様である。掘り直しや柱を抜き取った跡は確認できない。最も残りの良い最北の布堀溝では、布堀の長さ6.6m後、最大幅1.0m、布堀現況の深さ10～35㎝を測る。桁行の長さ約5.7m、梁間の長さ150～174㎝、柱の直径は概ね30㎝前後である。桁行の柱間距離1.14～1.5mでバラツキが多い。梁間の柱間距離は1.56～1.65mを測る。布掘や柱穴から出土した遺物は須恵器・土師器のごく細片が全部で約30点のみである。実測可能なものはなかった。そのほとんどは土師器で、須恵器は１点のみである。時期的な情報はほとんどない。

周辺の調査例からこの建物の北側にいわゆる３本柱柵が通るはずだが、ピットは数基あるものの、明確には把握できなかった。すでに削平されていると思われる。

②　土坑

SK03（図Ⅳ－４、図版Ⅳ－３）

調査区西側で検出した。平面形は歪んだ楕円形を呈し、長さ2.31m、幅1.53mを測る。断面形は逆台形で、深さ50㎝を測る。SD01が深さ５㎝前後で、この付近は特に浅いため、切り合いは明瞭ではない。弥生土器片・石斧・石鏃などビニール袋1袋が出土した。

③　木棺墓

SK05（図Ⅳ－４、図版Ⅳ－３）

調査区南西側で検出し、SB04に切られている。平面形は略長方形を呈し、長さ1.14m、幅0.52mを測る。断面形はきれいな箱形（長方形）を呈し、深さ60㎝を測る。埋土は自然堆積である。かなり小形であり、また側板などの痕跡は確認できないものの、SB04より古いことと、その形態から木棺墓と考えられる。出土遺物は弥生土器の細片が数点あるだけで、時期は不明であるが、周辺の甕棺群と同一の時期であろう。

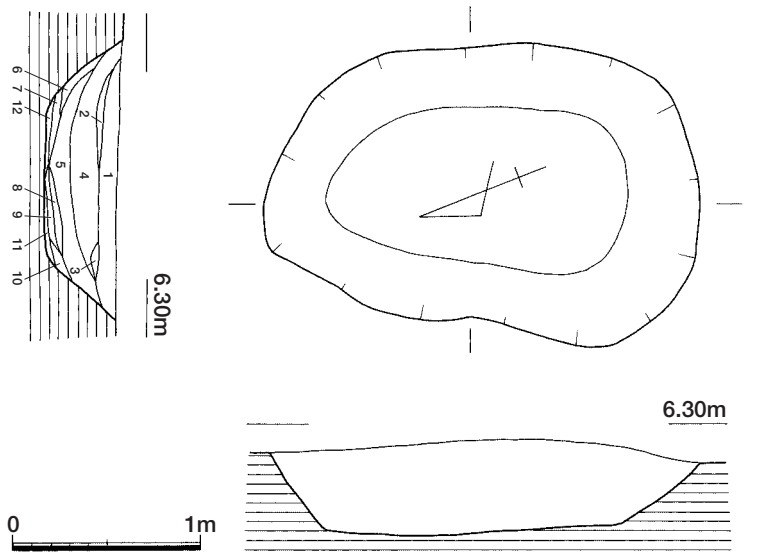
④　溝

SD01（図Ⅳ－４、図版Ⅳ－３）

調査区東側で検出した。北側の第157次調査、南側の第64次につながる。第64次調査内で、西側に矩形に曲がり、屋敷を取り巻く溝の可能性がある。断面形は逆台形で、床面はほぼ平坦である。深さ80㎝以上、上端幅約1.7m、床幅約１mを測る。堆積は、一部乱れているところもあるが、ほぼ自然堆積である。近世・近代の井戸・大型土坑に切られている。溝内から多くの遺物が出土したが、その多くが甕棺の破片で、他には古代～中世の土器・陶磁器・鉄滓が出土した。

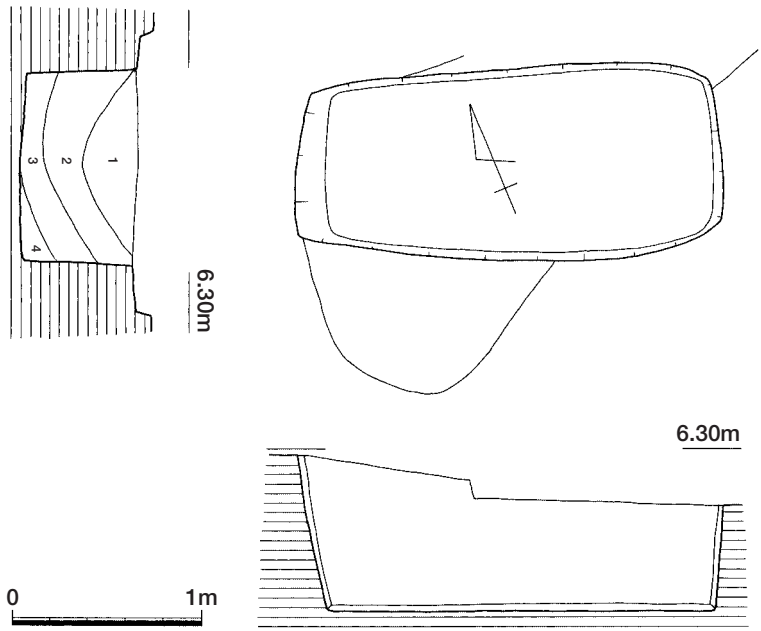
SD02

調査区西側で検出した。SD01と平行して走るが、SD01とは異なり、深さ５～10㎝と浅い。
第157次調査、第64次につながる。出土遺物は細片が少量あるだけである。



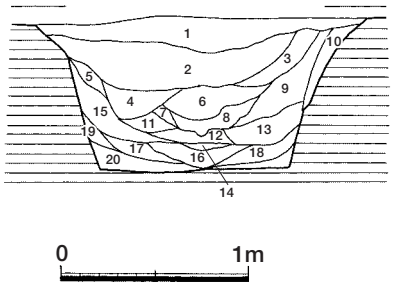
SK03

1　黄褐色ロームブロックを含む黄褐色粘質土
2　浅黄褐色粘質土
3　１に白色粘土含む
4　にぶい黄褐色粘質土に鉄分粒多く含む
5　褐色粘質土に白色粘土ブロック含む
6　灰褐色粘質土に浅黄橙色土含む
7　灰褐色粘質土に橙色砂質ローム含む
8　白色粘土
9　灰褐色粘質土
10　灰褐色粘質土に白色粘土含む
11　灰褐色粘質土に鉄分含む
12　灰褐色粘質土



SK05

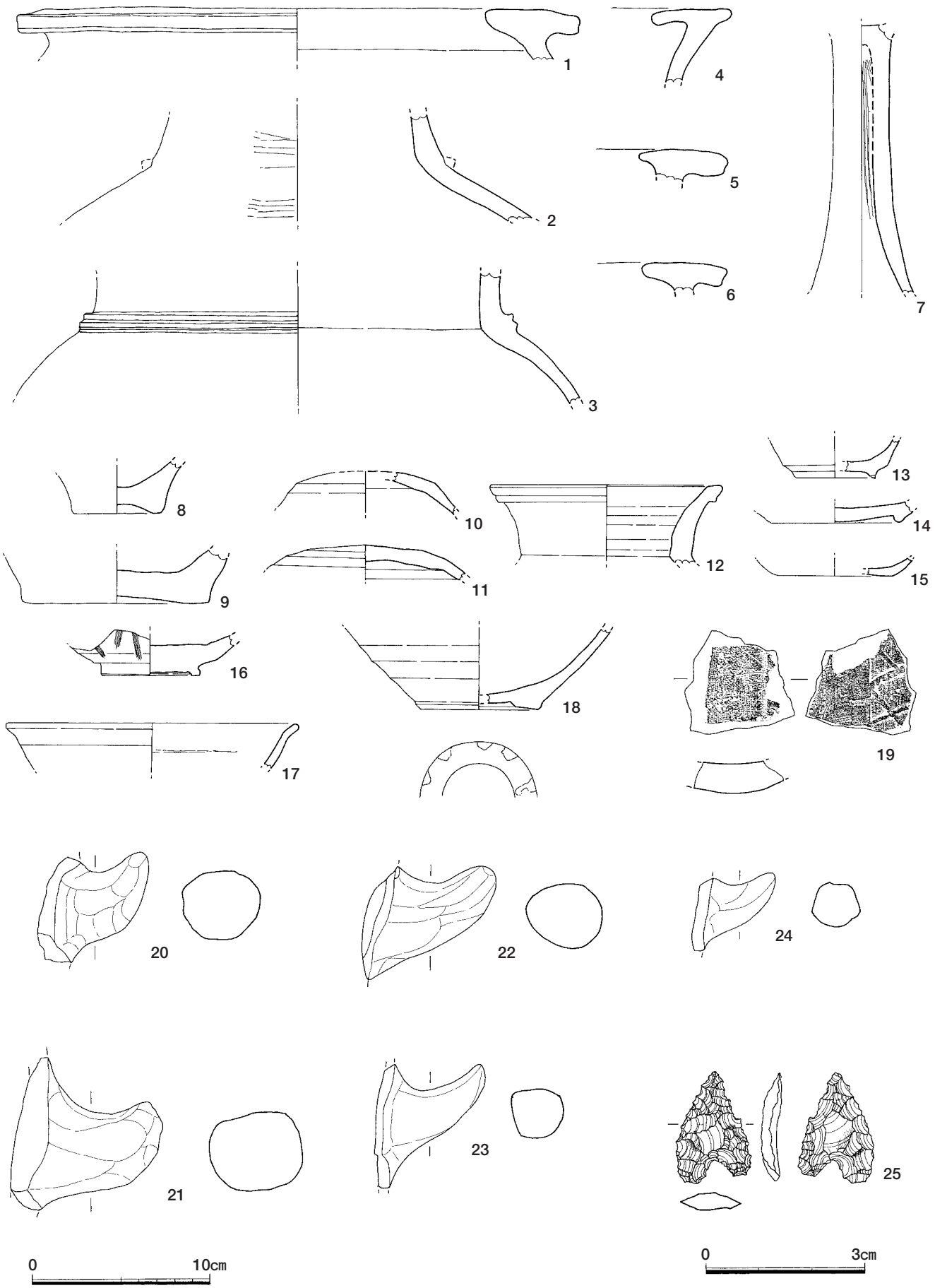
1　灰褐色粘質土ブロックを含む暗褐色粘質土
2　黒色土粒を含む褐色粘質土
3　黒色土ブロックを含む橙色砂質土
4　黒色土粒をわずかに含む橙色砂質土



SD01

1　黄褐色粘質土に粘質ローム粒含む
2　オリーブ褐色粘質土に粘質ローム粒含む
3　明黄褐色粘質土に砂質ローム粒含む
4　黄褐色粘質土に粘質ローム粒・黒色土粒含む
5　黄褐色粘質土に粘質ロームブロック含む
6　黄褐色粘質土に粘質ロームブロック多く含む
7　明黄褐色粘質土にロームブロック含む
8　明黄褐色粘質土＋粘質・砂質ロームブロック＋黒色土ブロック
9　明黄褐色粘質土に砂質ロームブロック粒含む
10　砂質ロームブロックに黒色土ブロック含む
11　明黄褐色土に粘質ローム粒と黒色土粒少量含む
12　黄色粘質ローム＋橙色砂質ローム＋黒色土＋黄褐色土
13　明黄褐色粘質土に砂質ローム粒・黒色土粒含む
14　砂質橙色ローム
15　黄褐色粘質土に砂質ローム粒含む
16　黄褐色粘質ローム
17　黄褐色粘質ロームブロック＋黒色粒ブロック
18　17に同じ
19　橙色砂質ロームブロックに黒色土粒含む
20　にぶい黄色粘質土に砂質ローム粒含む

図Ⅳ－４　第195次調査SK03（１/40）・SK06（１/20）実測図・SD01土層断面図（１/40）



図Ⅳ－５　第195次調査SD01出土遺物実測図（１/３、１/１）

（３）出土遺物

前述のように出土した遺物のほとんどはSD01とそれを切る近世・近代の遺構で、他に実測できたのはSK03出土の２点のみである。

SD01出土遺物（図Ⅳ－5，図版Ⅳ－4）

出土した遺物は弥生土器・甕棺片・須恵器・陶磁器・瓦・土師器・石鏃・剥片・滑石製石鍋片などで、全部でコンテナ３箱が出土した。

１～６は弥生時代の甕棺・壺棺の破片である。１は復元口径42㎝を測る鋤先口縁片で、両面ともに赤色顔料を塗布している。口縁端部が破片の約２/３ほど破損しているが、その破損部分にも顔料がついており、口縁端部を打ち欠いた後に塗布したのか、あるいは偶然ついたものか不明である。２・３は壺の破片である。２は復元頸部径約33㎝を測る。外面に赤色顔料を塗布している。頸部の段には顔料がなく、突帯がとれたものである。３は復元頸部径30.7㎝を測る。頸部に断面M字の突帯を巡らす。顔料は塗布していない。４～６は鋤先口縁の小片である。７は高坏の筒部で、外面下部に赤色顔料の痕跡がわずかに確認できる。８・９は弥生土器の底部である。８は底径5.1㎝、９は10.3㎝を測る。調整は８は不明、９は全面ナデである。

10・11は須恵器の坏蓋である。10は推定口径11㎝前後で、天井部外面はナデの後にヘラ記号を施している。体部外面はヘラケズリで、内面はナデである。灰白色を呈する。11は推定口径12～12.5㎝前後で、天井部から体部外面にかけてヘラケズリ、内面は粗い指によるナデである。外面に自然釉が付着している。12は須恵器の甕で、復元口径13㎝を測る。両面とも回転横ナデで仕上げている。色調は灰色を呈する。13・14は須恵器の高台坏で、13は復元高台径4.6㎝を測る、灰色の硬質の須恵器である。高台端部は欠失している。底部と体部の境は明瞭な稜が走る。14は復元高台径7.2㎝を測る。高台端部は本来尖っていたものであろう。白色を呈する軟質の須恵器である。15は土師器の皿である。復元底径6.5㎝を測る。調整は摩滅のため不明。

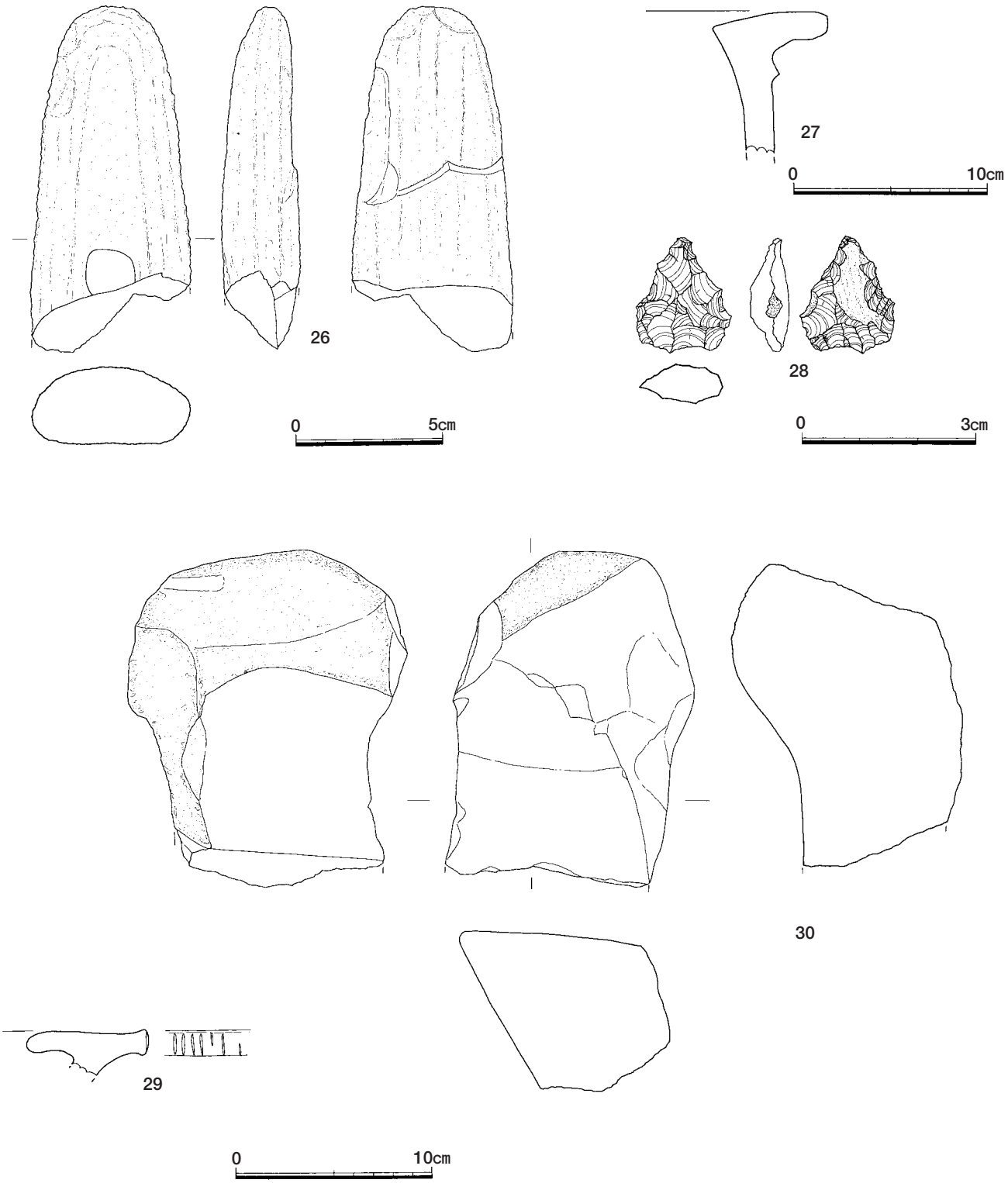
16は龍泉窯系劃花文と思われる青磁碗で、高台径5.6㎝を測る。釉調は灰オリーブ色で、胎土は淡い灰色を呈している。見込みは粗くヘラケズリした後に施釉している。わずかに文様が認められ、２本の沈線の間にハケ目状の工具で施文している。17は青磁碗で、復元口径16.4㎝を測る。釉調はオリーブ色の透明釉で、胎土は淡い灰色を呈している。18は越州窯系青磁碗で、高台径6.6㎝、推定口径17㎝前後、推定器高6㎝前後を測る。釉調はやや赤みがかったにぶい黄色で、胎土は淡い灰色を呈する。見込みには目跡が残っている。体部外面には横方向のヘラケズリを施している。他に白磁碗の底部片などが出土している。19は平瓦片である。凹面は目の細かい布目で、自然釉が付着している。凸面は連続する×文が陽刻されている。20～24は土師器の把手である。端部が丸みを帯びる20～22のものと尖り気味の23・24の２タイプがある。25は漆黒黒曜石製の石鏃である。長さ2.05㎝、幅1.45㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.8gを測る。全面に押圧剥離を施すが、全体的に剥片の形状が残っている。

SK03出土遺物（図Ⅳ－６，図版Ⅳ－４）

27は弥生土器の口縁部片である。26は堆積岩製の磨製石斧である。刃部を欠失している。全体の摩耗が激しく、石材のツブツブが表面に浮き出ている。現状の長さ11.7㎝、幅5.5㎝、厚さ2.6㎝を測る。28は漆黒黒曜石製石鏃である。裏面と側面の一部に自然面を残しており、厚さも厚く、全体的に調整不足の感があり、未製品の可能性もある。長さ1.93㎝、幅1.00㎝、厚さ0.6㎜、重さ1.4gを測る。

近代井戸出土遺物（図Ⅳ－６，図版Ⅳ－４）

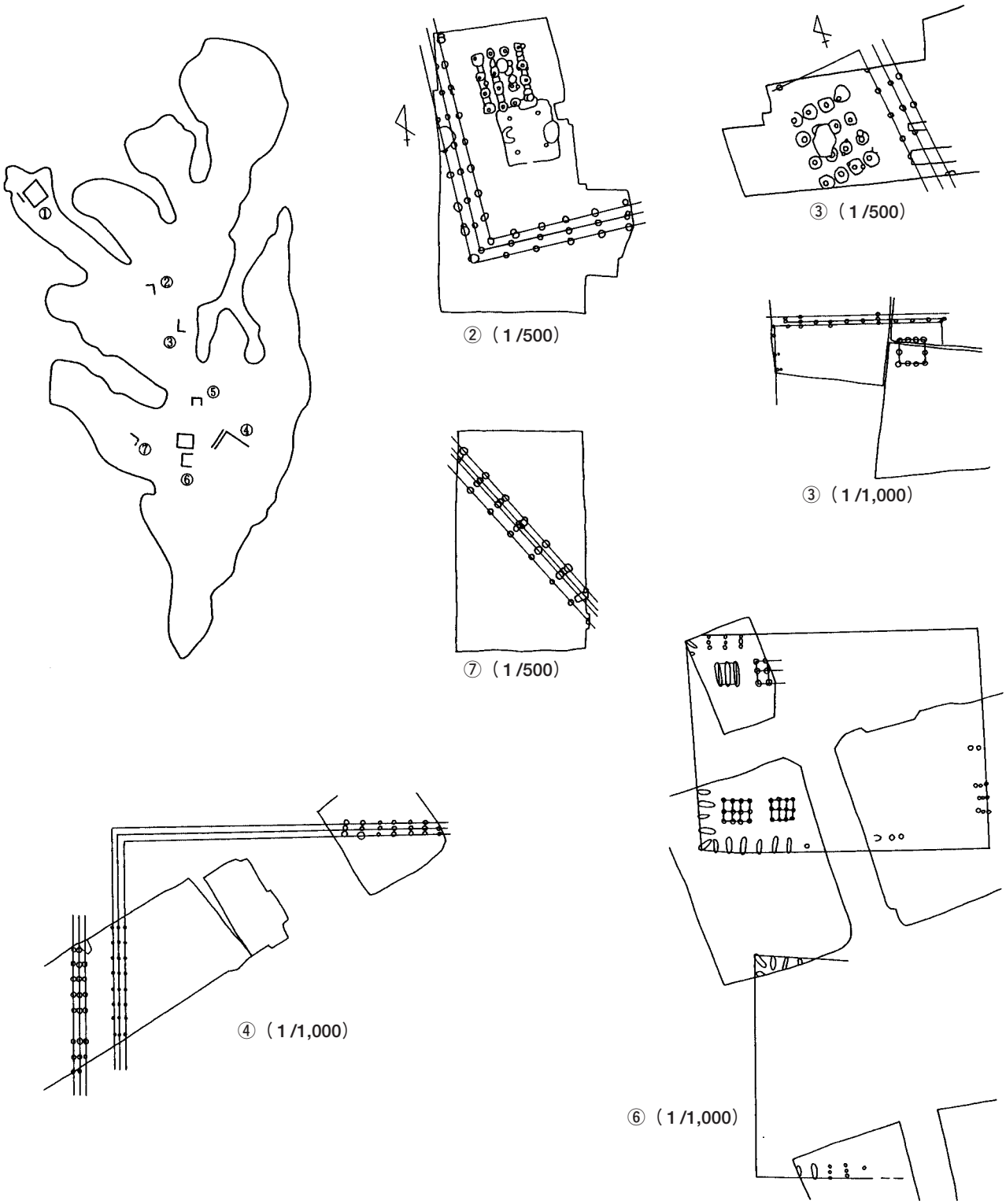
SD01を切る近代井戸（SX07）からの出土遺物である。29は弥生土器片で、口唇部に刻み目を施す。30は砂岩製砥石で、３面に研磨が掛かっているが、主に利用したのは図の左面である。現存長17㎝、最大幅13.3㎝、最大厚11㎝を測る。



図Ⅳ－６　第195次調査その他の出土遺物実測図（１/３、１/２、１/１）

3　ま　と　め

今回出土した遺物は、①弥生時代の甕棺、②古墳時代後期の須恵器、③平安期の土器・陶磁器・瓦、④中世前半期の土器・陶磁器、⑤中世後半期の土器・陶磁器と各時期に渡っているが、このうち遺構



図Ⅳ－7　有田遺跡群３本柱柵建物群配置図

に伴うものは⑤のみで、他に①と同時期であろうと推定される木棺墓と、土師器の入った総柱建物、石斧が出土した時期不明の土坑１基があるだけである。上記の時期の内、⑤は地内東西両側にある南北方向の溝が該当する。SD01からは多くの遺物が出土したが、そのほとんどは弥生時代の遺物で、実測した遺物のうち中世の遺物は15と17～18のみである。青磁・白磁は15・16世紀のものであり、北側の第157次調査区、南側の第64次調査区と矛盾しない。中世後半期の館である可能性が高いが、未調査区が多く、全体構造の把握までは至っていない。

溝から出土した平安期の越州窯系青磁は、この周辺の他の地点からも数点出土している。現在この地区で平安期の明確な遺構は検出し得ていないが、今回細片ではあるが、瓦が出土したことからも、今後該期の重要遺構が検出される可能性がある。

今回の調査で検出した総柱建物SB04は有田遺跡の各所や比恵遺跡などで発見されている、いわゆる３本柱柵に囲まれた建物群（３本柱柵建物群）の一角を成している。３本柱柵建物群は、現時点では律令期の筑前国の範囲内でのみ見つかっている、３列の柵状遺構に囲まれた中に総柱建物群が複数棟建築されている遺構である。時期的には概ね６世紀の後半代から７世紀の半ば前後までに収まる可能性が高く、筆者はミヤケの遺構での可能性が高いと考えている。柵は矩形になるものがほとんどであるが、方位との関連は認められない。建物群の配置も、千差万別であり、律令期の郡衙のような規則性は認められない。建物自体も坪掘建物もあれば、布掘建物もある。

有田遺跡には３本柱柵建物群が７地点で確認されている（図Ⅳ－７）。当地点のものを見ると、３本柱柵が方形・長方形ではなく、北東側に張り出していること、西側の柵が２重に成っている可能性が極めて高いことなど、他の３本柱柵とは異なった特徴がある。建物は柵沿いに３棟確認されているが、東列の２棟が坪掘建物なのに対し、今回検出した建物は布掘建物である。ただし同様の例は有田遺跡群第101・107次調査（図Ⅳ－７の⑥の建物群）も同様である。

これらの建物や柵からは出土遺物が極めて少なく、これらの遺構から時代を決定するのは困難であり、今回検出した建物からも明確に時期が判断できる遺物はなく、混入した土師器・須恵器の細片が出土しただけであった。３本柱柵にいたっては、ピットは数基存在するものの、明確に３本柱柵と断定できるものではなく、調査以前にほとんど削平されているものと考えられる。

調査区南半（南から）

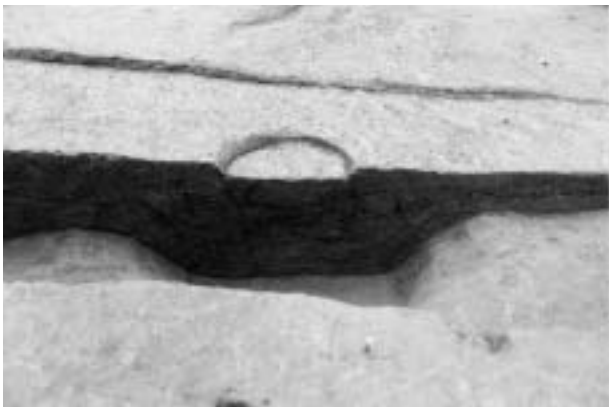
調査区北半（東から）

図版Ⅳ－１　第195次調査全景

柱穴検出時

完掘後

図版Ⅳ－２　第195次調査SB04


SB04柱穴土層①

SB04柱穴土層②

SB04柱穴土層③

SB01土層

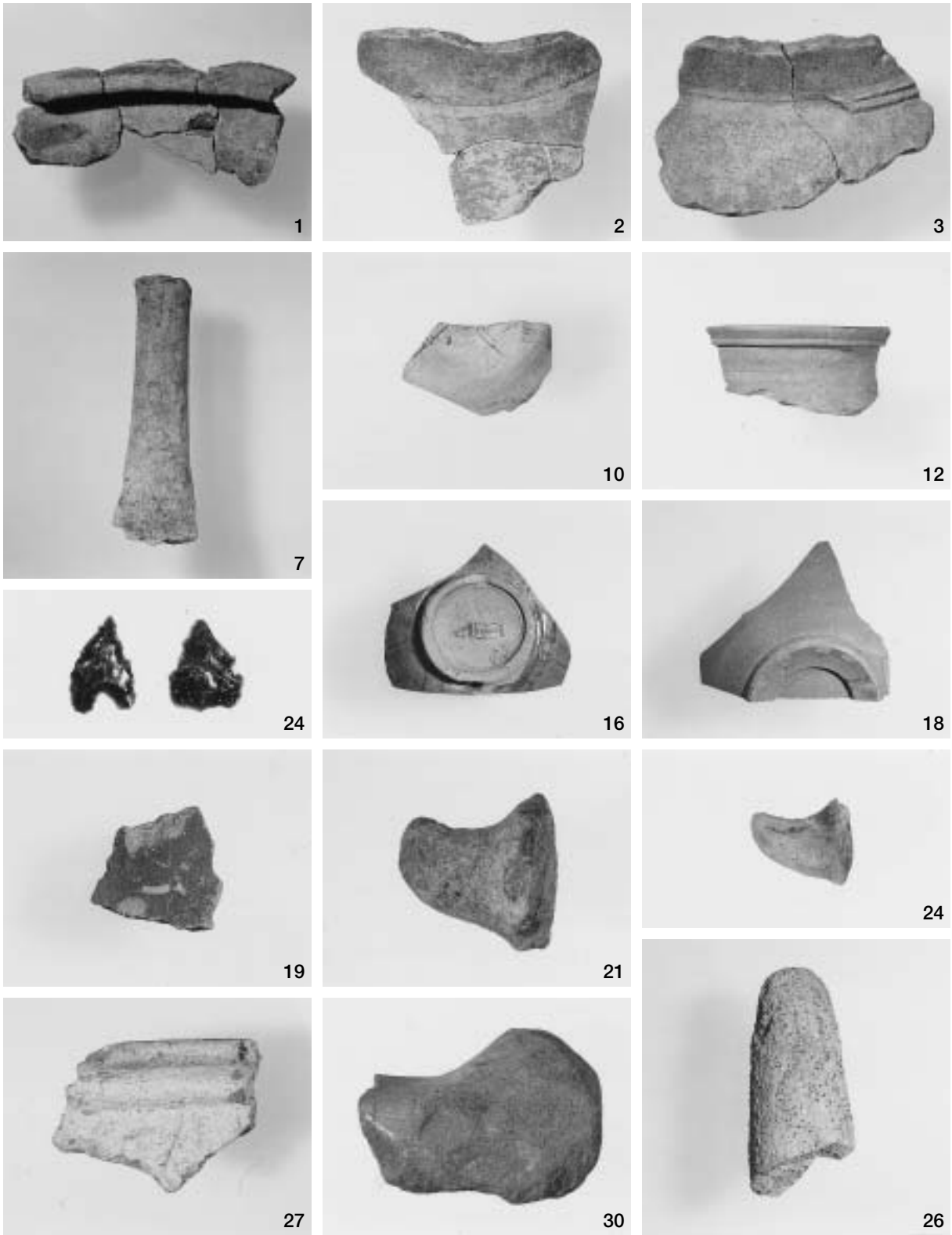
SK03土層

SK03（東から）

SK05土層

SK05（北から）

図版Ⅳ－３　第195次SB04柱穴及びその他の遺構



図版Ⅳ－４　第195次調査出土遺物

Ⅴ　第196次調査

1　調査区の位置と周辺の既往の調査

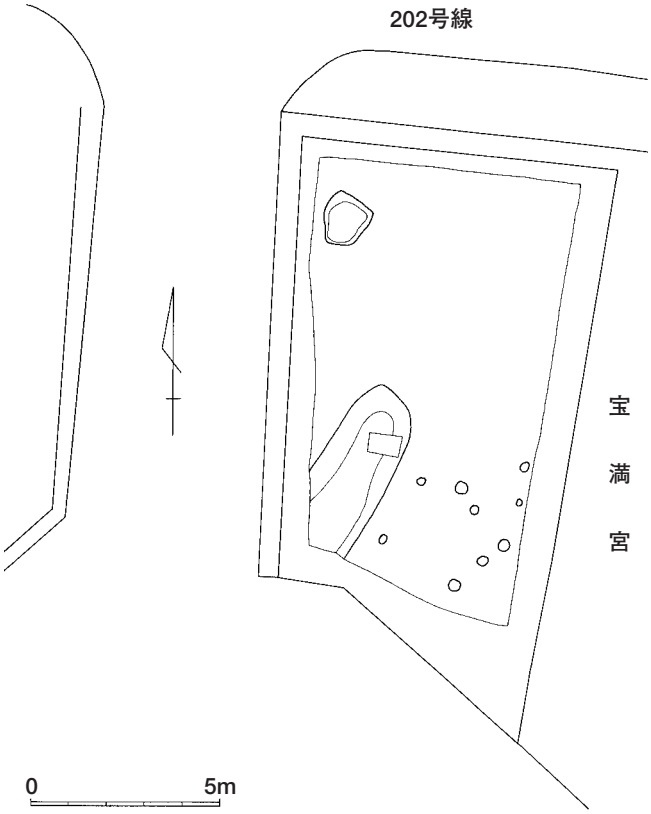
第196次調査は早良区小田部16-2、17-2にあり、有田台地の西端、北西方面に延びる台地上に位置する。道路を挟んだ北側では第153次調査が行われている。

2　調査の記録

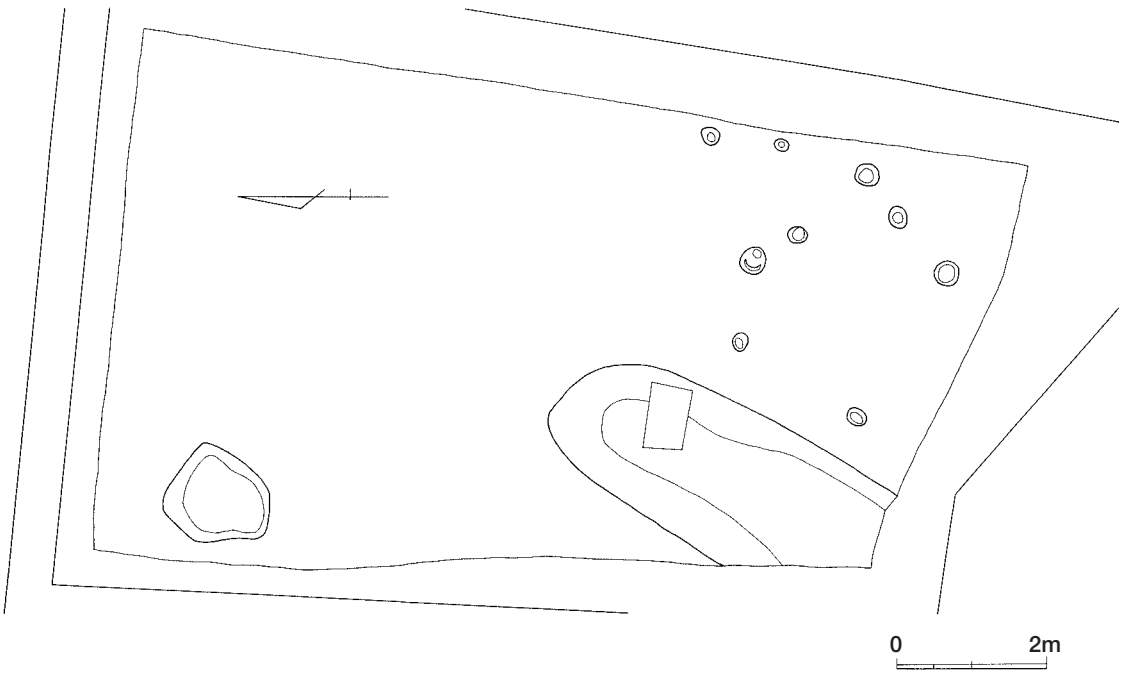
現状における遺跡の標高は7mほどで、現地表下0.7mの鳥栖ローム上にて遺構を検出した。検出遺構は土抗1とピットのみ。出土遺物は遺構面等より中・近世陶磁器の破片がごくわずかに出土したのみである。遺構に伴う遺物はなく、遺構の時期は不明である。

3　まとめ

土抗は一辺1mほどの略方形を呈するもので、柱穴である可能性もある。



図Ⅴ－1　第196次調査地点位置図（1/200）



図Ⅴ－2　第196次調査遺構配置図（1/100）

写真Ｖ－１　第196次調査全景（北西から）

Ⅵ　第201次調査

1　調査区の位置と周辺の既往の調査

第196次調査は早良区小田部1丁目16の2にある。当調査地点は第161調査地点の北側、第171次調査地点の西側に当たる。

2　調査の記録

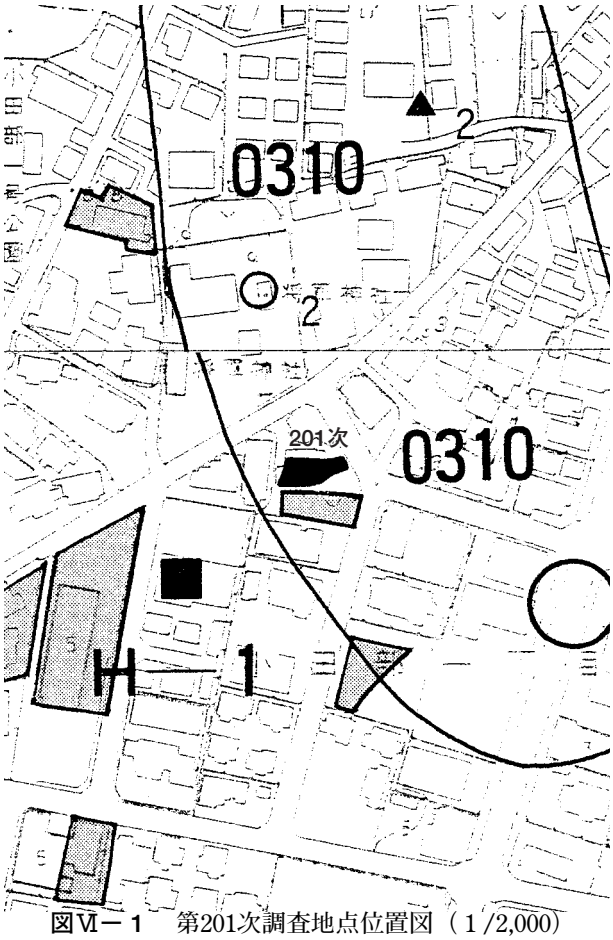
（1）調査の概要

発掘調査はまず、バックホウによる表土除去から開始した。調査面積の関係から調査区西半の調査より開始し、その終了を待って土砂を反転し、東半の調査を行った。遺構面は東側へ向けて1mほどの斜面をみせる。

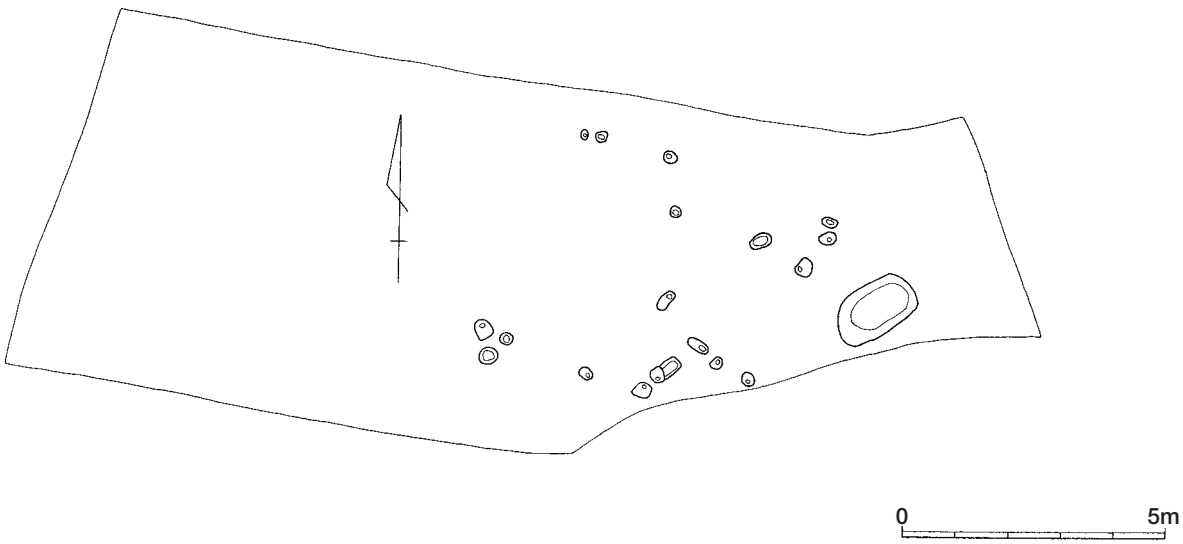
遺構としてはピットのみを検出した。出土遺物は極めて少なく、図化に耐えない土師器の破片を遺構面より採集したのみである。

3　まとめ

「ピット」の大半は木根痕で、確実に遺構であると判断できるものは数少ない。遺構密度は極めて低いといえる。



図Ⅵ－１　第201次調査地点位置図（１/2,000）



図Ⅵ－２　第201次調査遺構配置図（１/150）

写真Ⅵ－1　第201次調査全景（北から）

Ⅶ　第203次調査

1　はじめに

（一）調査にいたる経緯

平成２年５月17日、真鍋佳祐氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、早良区小田部５丁目82-１、82-２における専用住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。

申請地は周知の遺跡である有田遺跡群内に位置しており、申請地の隣地では数次の発掘調査が行われており、良好に遺構が存在していることが推測された。これを受けて埋蔵文化財課は平成２年７月４日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から５～20㎝ほど掘り下げた鳥栖ローム土層面上において弥生時代から古墳時代に属する遺構と遺物の存在を確認した。建物の基礎工事は遺構面に影響を及ばさない範囲で行われることとなり、発掘調査は行わず遺構は現状のまま保存されることとなった。

平成14年２月８日、真鍋祐樹氏より同一敷地内の南側部分について埋蔵文化財事前審査願が提出された。平成２年度の試掘調査の結果では敷地南側部分においても、竪穴住居などの遺構が確認されており、また、遺構面が表土直下で検出されたため、建物工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないことから、工事によって止むを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は国庫補助を当てて、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成14年５月７日に着手し、同年５月27日に終了した。

（二）調査体制

調査委託			真鍋　祐樹氏
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田　征生
調査総括	同	埋蔵文化財課　課長	山崎　純男
	同	埋蔵文化財課　第２係長	田中　壽夫
調査庶務	同	文化財整備課	御手洗　清
調査担当	同	埋蔵文化財課　事前審査係	大塚　紀宜
			田上　勇一郎（試掘調査）
		第２係	本田　浩二郎（本調査）

調査作業	阿部　幸子	池　　聖子	大音　輝子	小池　温子
	小路丸嘉人	小路丸良江	永田　優子	永田　律子
	夏秋　弘子	寺園恵美子	増田ゆかり	吉川　暢子

整理作業	有島　美江	室　以佐子	鳥尾　安子

遺跡調査番号	０２１３	遺 跡 略 号	ART203
調査地地番	早良区小田部5丁目82-１、82-２	分布地図番号	82　原
開 発 面 積	99.18㎡	調 査 面 積	119.4㎡
調 査 期 間	2002．５．７～2002．５．27		

2　発掘調査の記録

（一）調査の概要

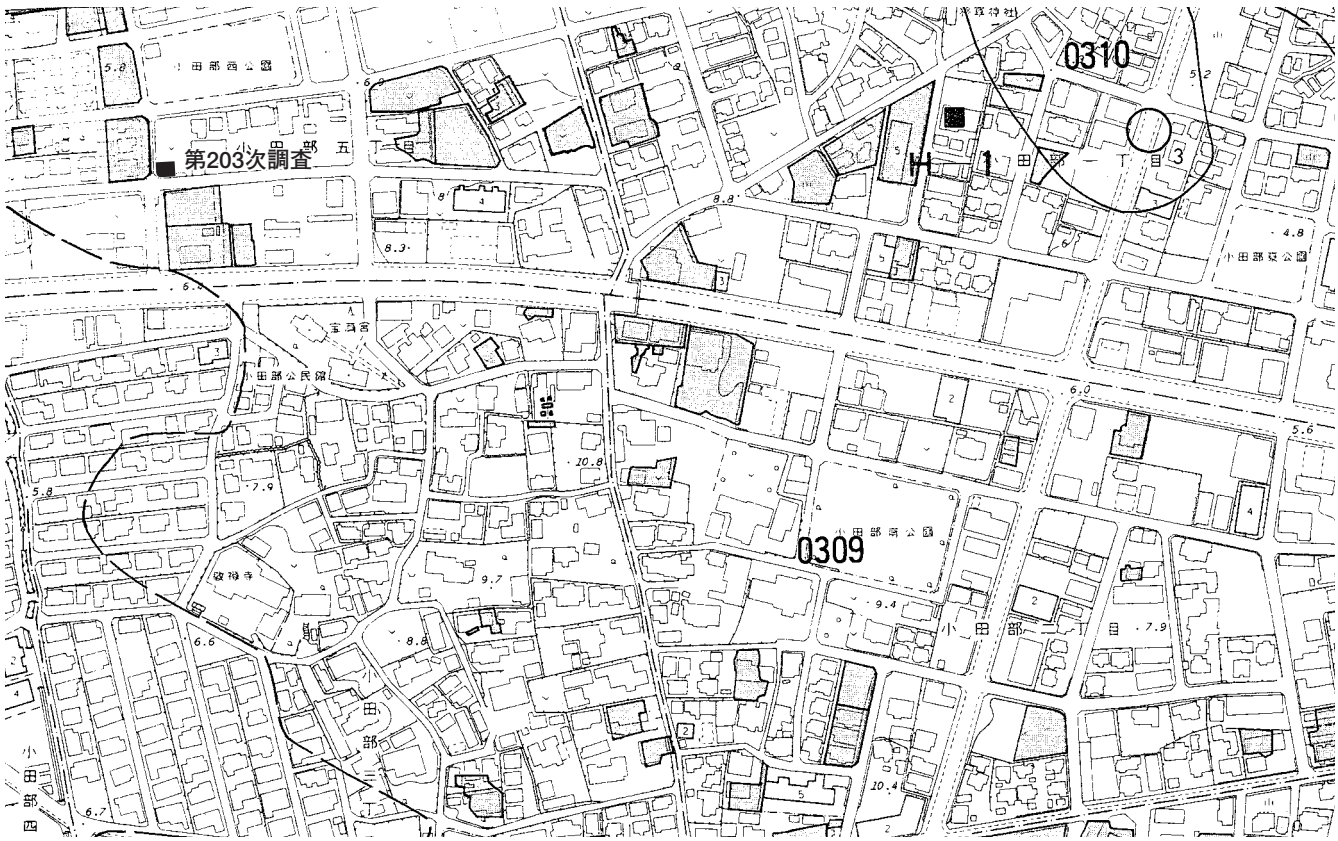
有田遺跡群は、福岡市の西南部に広がる早良平野の北側中央部に位置している。遺跡群は標高15m前後を測る洪積世独立台地上に占地しており、有田地区・小田部地区・南庄地区の三地区に大きく分けられる。また、遺跡群の占地する台地は、南北1.7㎞×東西0.8㎞の範囲であり、河川の浸食などにより北側に広がる八つ手状の地形をなしている。

今回報告を行う、有田遺跡群第203次調査地点は遺跡範囲の南東側に位置する小田部地区に含まれており、西側に隣接して第125次、南側では第142次・第143次などの発掘調査が行われている。

調査は約120㎡の狭い範囲で行われ、古墳時代前期の竪穴住居一軒、近世の区画溝一条、調査区内では建物としてはまとめきれない柱穴群などの遺構を検出した。

竪穴住居は調査区内に南側半分がかかるのみで北側については未調査であるが、平面形は方形を呈し一辺が5.7m前後を測る。住居内にはコの字状にベット状遺構を配置しており、床面中央部付近には炉を設置する。隣接する第125次調査で検出された同時期の焼失住居（SC-01）と同様に焼土・炭化材が検出されており、同時期に類焼した住居と考えられる。近世の時期が考えられる溝は、旧小田部村の区画を示すもので、近辺の調査においても同方向または直交する溝が複数検出されており、近世の段階では方形区画を採っていたことが伺える。

遺物はコンテナケース３箱分が出土している。内容としては、土師器・須恵器・近世国産陶器類・黒曜石製石器・剥片などがある。



図Ⅶ－１　第203次調査区位置図（S＝１/4,000）

図Ⅶ－２　第203次調査遺構全体図（S＝１/80）

写真Ⅶ－１　第203次調査区東側遺構検出状況（北東から）

写真Ⅶ－２　第203次調査区西側遺構検出状況（南西から）

（二）遺構と遺物

第203次調査は約120㎡と限られた面積についての調査であったため、検出された遺構もわずかであった。また、対象地南側については区画整理以後の開発により遺構面である鳥栖ローム層も大幅に削平を受け遺構の大半が消滅していた。以下に検出された遺構の説明を行う。

ａ．竪穴住居

SC-38（図Ⅶ－３）

調査区北西側で検出した竪穴住居である。住居北半分が調査区範囲外に位置するため、南側半分のみの調査を行った。平面形は方形で、検出された部分では一辺5.6～6.0m前後を測る。過去の開発によって著しく削平を受けており、検出面から住居床面までは30㎝前後のみ残存している状況である。住居は入り口を南側に配し、入り口部には土坑を設置する。ベット状遺構はこの入り口部土坑を挟んで住居内を全周、または入り口対面部で切れるように設置されてものと考えられる。

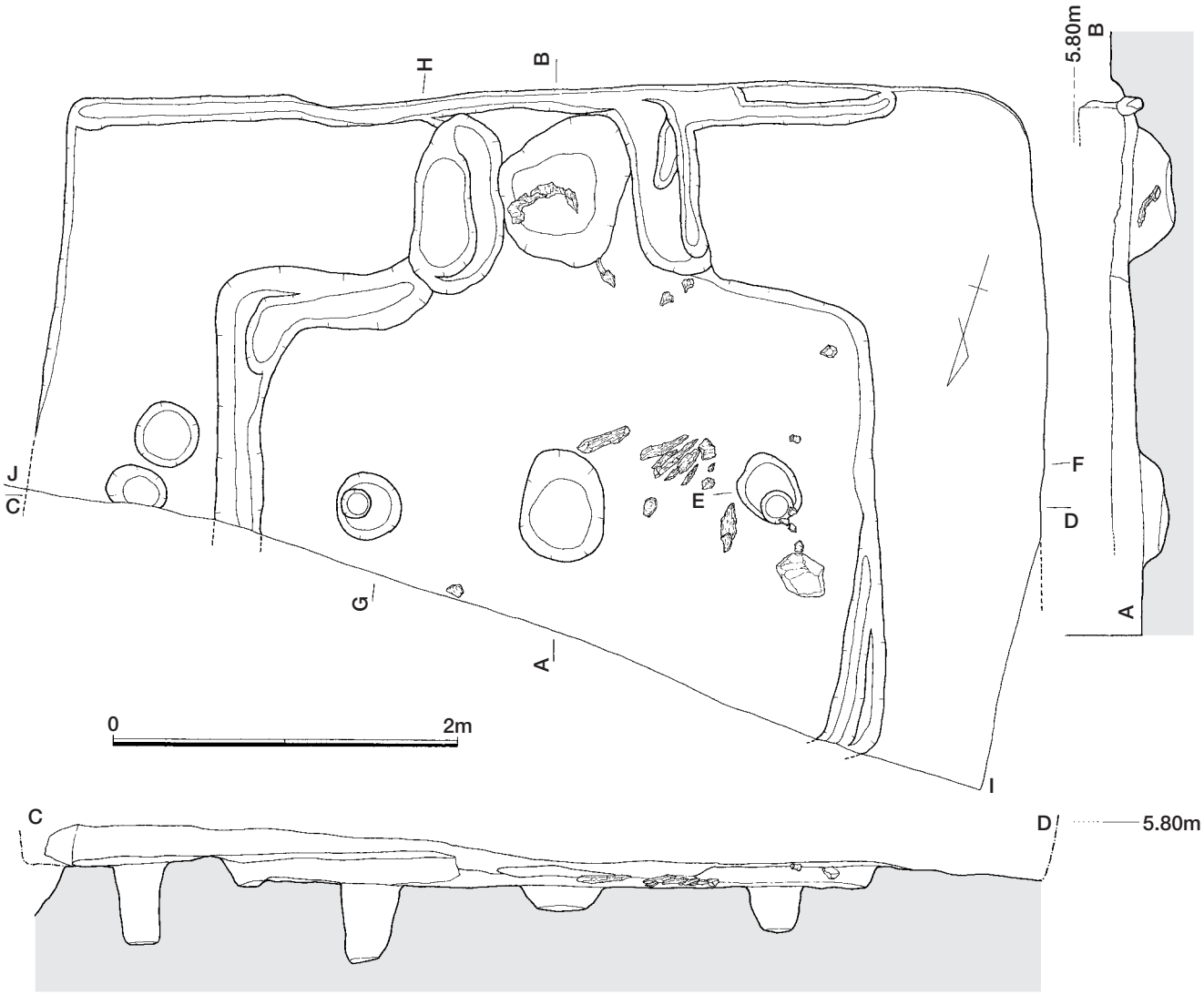
住居床面中央部付近には炉が設置されており、炉の北側の床面は被熱により赤変化している。炉内には焼土・灰などが堆積する。主柱穴は二本柱で、炉を中心として直線的に検出される。柱間の距離は2.5m前後を測る。柱穴は直径30～40㎝前後の円形で、住居を床面から底面までの深さは40㎝前後を測る。柱穴底面には直径20㎝前後の柱圧痕が検出される。ベット状遺構は住居東側では床面の高さまで掘削してから10㎝前後の盛り土を行い形成されるが、西側は基盤層である鳥栖ローム層を一段高く削り出し、上層部に薄く粘質土を貼り土調整し形成されている。遺跡の基盤層である鳥栖ローム層は、調査区東側では一般的な粘性がある締まった土質であるが、西側隅部では赤褐色粘質土層・黄褐色粘質土層・褐色砂質土層が交互に堆積している状況が検出された。第203次調査地点は地形的に東側に

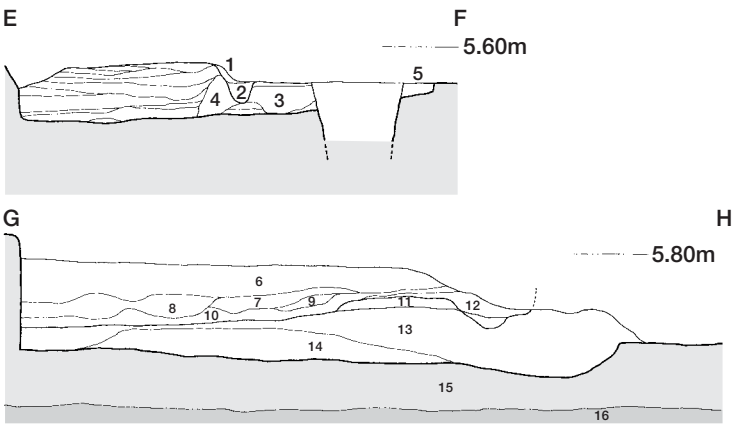
写真Ⅶ－３　第203次調査SC-38完掘状況（南から）

写真Ⅶ－４　第203次調査SC-38調査状況（南西から）

写真Ⅶ－５　第203次調査SC-38北側土層断面（南から）

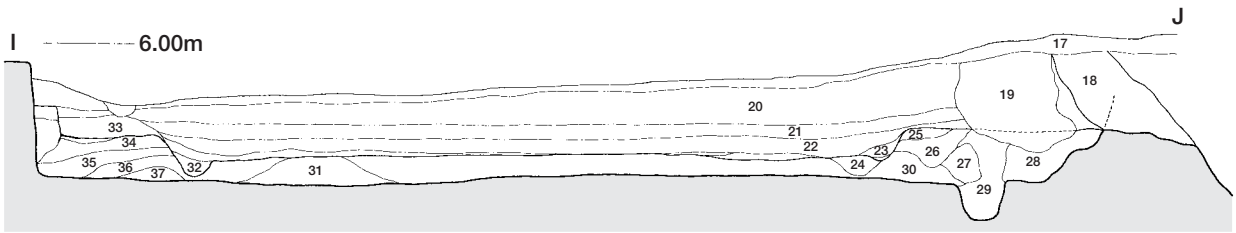
写真Ⅶ－６　第203次調査SC-38土層堆積状況（東から）





SC-38土層注記

1 白色粘土（八女粘土由来）
2 暗褐色砂質土（壁溝埋土）
3 黄褐色砂と褐色砂の交互堆積層
4 灰色粘土（八女粘土由来）
5 暗黄褐色砂質土（住居床面）
6 暗褐色土（炭化物・焼土混入）
7 暗黄褐色粘質土
8 暗黄褐色土
9 焼土層（炭化物混入）
10 暗褐色粘質土（炭化物・遺物混入）
11 暗黄褐色粘質土（ベット貼土）
12 暗褐色粘質土（壁溝埋土）
13 黄褐色粘質土
14 赤褐色粘質土
15 鳥栖ローム層（基盤層）
16 八女粘土層
17 旧表土面
18 暗褐色土（土坑埋土）
19 樹木による攪乱
20 暗褐色土（６層）
21 暗黄褐色土（８層）
22 暗褐色粘質土（10層）
23 暗黄褐色粘質土（壁溝埋土）
24 黄褐色砂質土
25 黄褐色粘質土（ベット貼土）
26 暗褐色土
27 暗褐色砂質土
28 暗黄褐色粘質土
29 黒褐色土（土坑埋土）
30 黄褐色粘質土（八女粘土混入）
31 橙色砂質土
32 黄褐色粘質土＋八女粘土
33 黒褐色粘質土
34 黄褐色砂質土
35 赤褐色砂質土
36 黄褐色砂質土
37 赤褐色粘質土



図Ⅶ－３　第203次調査SC-38遺構実測図（S＝１/40）

向かって傾斜する斜面上に位置しており、ベット状遺構の構造差は土質の差異を解消するために行われた結果と考えられる。ベット状遺構を形成する盛り土を除去すると、住居構築時の掘削痕が検出される。壁溝はベット状遺構の内側と住居南側壁際に設けられる。壁溝内には暗褐色粘質土が堆積していた。

住居床面上からは炭化材・焼土が検出された。炭化材は長さ20～40㎝前後で、向きを揃えた状態で検出されるものもあった。住居上部の屋根の構造材の一部と考えられる。住居埋土の土層観察からも住居床面上に焼土・炭化物を多量に含んだ暗褐色粘質土が堆積していることが観察でき、この住居が焼失住居である可能性が考えられた。本調査地点の西側に隣接して位置する第125次調査で検出されたSC-01は古墳時代前期末～中期頃に位置づけられる住居であるが、この住居も焼失住居として報告されている。本調査で検出されたSC-38とSC-01はほぼ同一方向の主軸を持ち、同一方向に入り口を設置しており、両住居間の距離は約17mを測る。同時期に類焼した可能性も考えられる。

遺物は住居埋土中よりコンテナケース１箱分が出土した。細片資料が多く、接合できたものも少ない。図化しなかったが、床面上には作業台として使用されたものと考えられる石材が据えられていた。20～30㎝前後の大きさで、扁平な面を上面にする。

出土遺物を図Ⅶ－４に示した。

１は須恵器蓋である。口径14.2㎝、器高4.4㎝を測る。胎土は精緻、焼成は良好であり色調は外器面が濃灰色を内器面が暗小豆色を呈する。天井部はヘラ削りで調整される。２は須恵器蓋坏である。復元口径13.6㎝、受部径15.4㎝を測る。口縁部は外反する。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。３は土師器壺である。口径12.2㎝、胴部径17.0㎝を測る。外器面は摩滅しており、器面調整は観察できない。内器面上部にはヘラ削りの痕跡が観察できる。焼成は良好で色調は橙色を呈する。

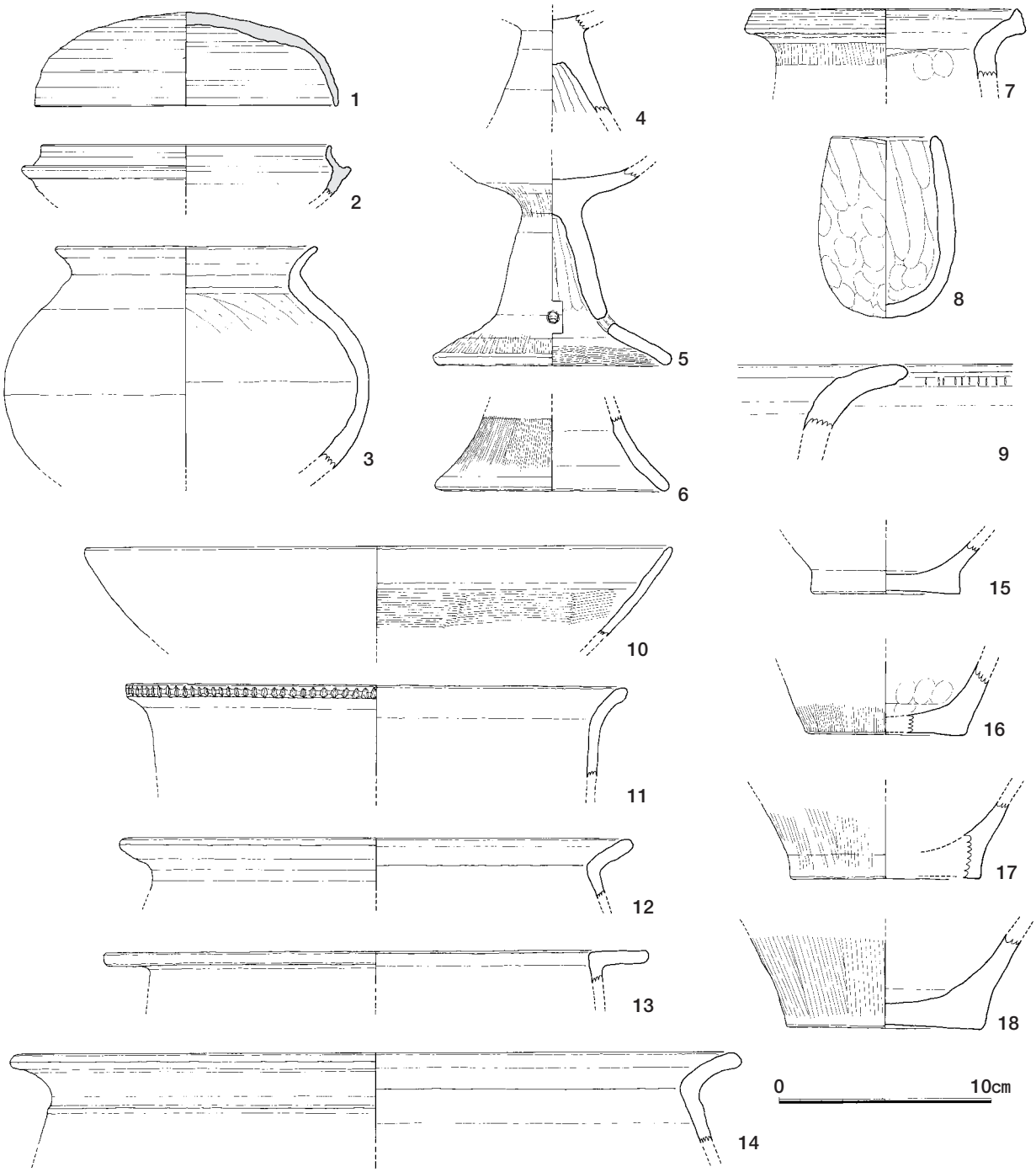
写真Ⅶ－７　第203次調査SC-38調査状況（南から）

写真Ⅶ－８　第203次調査SC-38土層断面（南から）

写真Ⅶ－９　第203次調査SC-38遺物出土状況（南から）

写真Ⅶ－10　第203次調査SC-38内土坑土層断面（東から）

4は土師器高坏脚部片である。外器面は摩滅のため器面調整は観察できない。内器面には指ナデ痕が残る。5は土師器高坏脚部片である。底径10.8㎝を測り、器面の一部に丹の痕跡が観察できる。脚端部・接合部には刷毛目調整が施され、内器面では横位の刷毛目調整が施される。脚の下位には穿孔が施される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。6は土師器器台脚部片である。復元底径13.0㎝を



図Ⅶ－4　第203次調査遺物実測図1（S＝1／3）

測る。外器面には縦位の刷毛目調整が施される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

７は弥生土器小壺口縁部片である。復元口径は12.4㎝を測る。口縁部には横位の刷毛目調整が施され、頸部はナデ調整が施される。体部には縦位の刷毛目調整が観察できる。色調は暗褐色を呈する。８は蛸壺である。口径5.2㎝、器高8.5㎝を測る。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。ナデ調整で成形されており、底部付近には指頭圧痕が残る。紐をかける孔は穿孔されていない。

９は弥生土器の甕口縁部である。口唇部下に刻み目を施す。色調は褐色を呈する。10は土師器高坏坏部片である。復元口径は27.6㎝を測る。外器面は摩滅のため器面調整は失われているが、内器面中程には横位の刷毛目調整が観察できる。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

11は弥生土器甕口縁部片である。復元口径23.4㎝を測り、口縁部下に刻み目を施す。内外器面共に摩滅により器面調整は観察できない。色調は暗褐色を呈する。12は弥生土器甕口縁部片である。口径24.0㎝を測る。13は弥生土器甕の口縁部片である。復元口径25.4㎝を測る。14は弥生土器の甕口縁部片である。復元口径は34.2㎝を測る。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

15は弥生土器壺の底部片である。底径は7.0㎝を測る。16は弥生土器甕底部片である。復元底径は7.6㎝を測る。外器面には刷毛目調整、内器面には指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。17は弥生土器甕底部片である。復元底径は9.0㎝を測る。外器面に刷毛目調整を施す。被熱により器壁の一部が赤変化する。18は弥生土器甕底部片である。復元底径は9.2㎝を測る。外器面にはやや幅の広い刷毛目調整が施される。色調は暗褐色を呈する。

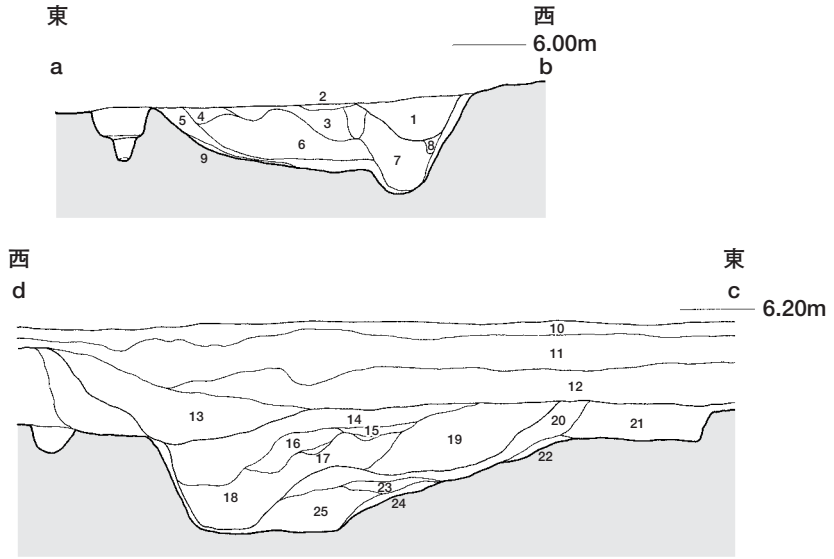
SC-38とした住居は、弥生時代の遺構に重複するように構築されたものと考えられ、住居埋土より弥生時代の遺物が比較的多く出土した。住居自体の時期は構造と遺物より５世紀前半代が考えられる。

写真Ⅶ－11　第203次調査SD-01完掘状況（南東から）

写真Ⅶ－12　第203次調査SD-01・SD-02土層断面（北西から）

写真Ⅶ－13　第203次調査SD-01・SD-02土層断面（南東から）

写真Ⅶ－14　第203次調査SD-01・SD-02土層断面（西から）



SD-01・SD-02土層注記

1　暗褐色砂質土
2　暗青灰色砂質土
3　八女粘土
4　暗褐色粘質土十八女粘土
5　暗褐色砂質土
6　暗黄褐色砂質土
7　八女粘土
8　暗褐色粘質土
9　暗灰褐色土
10　バラス（現地表面）
11　旧耕作土面
12　暗褐色土（遺物包含層）
13　暗褐色砂質土（SD-01埋土）
14　八女粘土
15　暗褐色粘質土十八女粘土
16　黄褐色砂
17　黄褐色粘質土
18　八女粘土
19　八女粘土十暗褐色粘質土
20　暗褐色土
21　黒褐色粘質土（土坑埋土）
22　黄褐色粘質土
23　暗褐色土十鳥栖ローム
24　暗黄褐色粘質土
25　暗褐色粘質土十鳥栖ローム

図Ⅶ－５　第203次調査SD-01・SD-02土層断面図（S＝１/40）

ｂ．溝

SD-01・SD-02（図Ⅶ－５）

調査区東側で検出された遺構である。検出時には１条の溝遺構と考えられたが、土層断面の観察により掘り直しの行われた２条の溝遺構であることが判明した。主軸方向はN－40°－W前後の方向を採る。南側に位置する第142次調査においても検出されており（SD03）、主軸方向と出土遺物から近世まで存続していた区画溝と考えられる。

SD-01は幅80㎝、断面形は緩いU字形を呈し、検出面から底面までの深さは30㎝前後を測る。溝内には暗褐色砂質土が堆積する。SD-02は幅1.8m、断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは50㎝前後を測る。溝内には暗黄褐色砂質土を主体として東側方向からの埋土が堆積する。埋め戻しには鳥栖ローム層下に堆積する八女粘土が用いられている。

遺物は国産陶器や弥生土器の細片などが出土するが、点数は少ない。

ｃ．土坑・柱穴

調査区北東側の隅部からは土坑・柱穴などの遺構が比較的密な状態で検出された。区画整理による削平以前の自然地形が北東側に向かって傾斜していたものと考えられ、検出された土坑などの遺構は検出面から50㎝前後の深さで残存し、柱穴底面には柱圧痕が観察できるものもあった。調査区内で検出されたこれらの土坑・柱穴からは建物などを復元することはできなかった。

SP-17・SP-26・SP-36等の柱穴はほぼ円形の平面形を呈し、直径30～50㎝を測る。検出面から底面までの深さは30～50㎝前後を測り、暗褐色～黒褐色粘質土の埋土が堆積する。

SP-09・SP-27・SP-34等の土坑は平面形が長方形を呈し、北側に一段深くなる断面形を呈する。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土の埋土が堆積する。

SK-24とした土坑は平面形が不定型で、中央部付近に楕円形の土坑が検出される。

調査区西側では土坑・柱穴などの検出はわずかであり、平面的には鳥栖ローム土層中の縞状堆積が観察できるのみである。区画整理などの過去の開発によって大きく削平されたことが伺える。

これらの土坑・柱穴などから出土した遺物の中で重要と思われる土器・石器について説明を行う。

ａ．土器（図Ⅶ－６）

１は須恵器蓋の摘み部片である。SP-17埋土より出土した。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。２は須恵器蓋である。SK-37より出土した。天井部はヘラ削り調整される。胎土は精緻であり、焼成は良好。色調は灰褐色を呈する。３は土師器蓋坏である。器形は須恵器坏を模倣する。復元口径12.6㎝、受部径15.0㎝を測る。SK-37より出土した。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

４は須恵器蓋坏である。口径12.0㎝、受部径14.4㎝を測る。SP-18埋土より出土した。口縁部の立ち上がりは低く、内傾し端部でわずかに外反する。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

５は須恵器蓋である。口径8.8㎝、器高3.2㎝を測る。SP-18より出土した。天井部は狭い範囲にヘラ削りが施される。焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。６は土師器高坏脚部片である。SP-36より出土した。坏部は接合部より欠損する。外器面は摩滅により調整痕が失われるが、内器面にはナデ痕が残る。７は須恵器壺である。復元口径11.2㎝、復元胴部径17.2㎝を測る。SP-26より出土した。口縁部は低く、頸部よりわずかに外反して立ち上がる。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

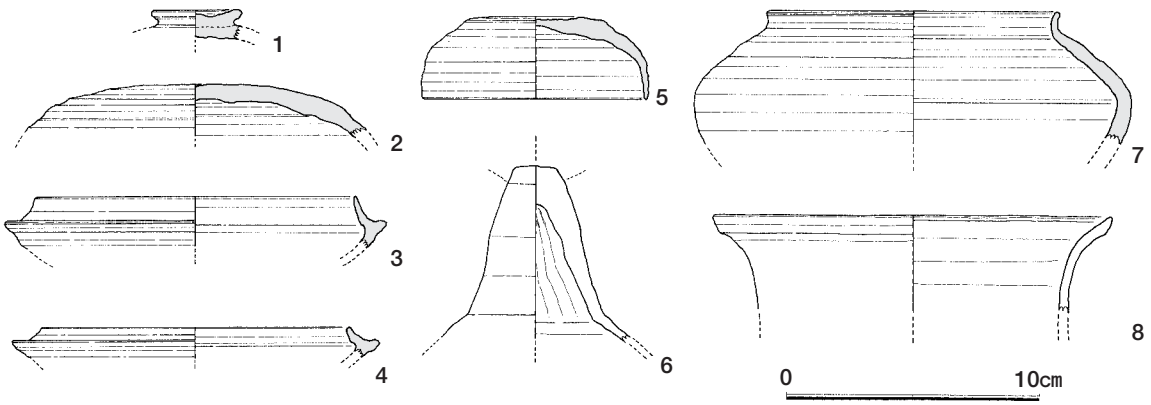
８は土師器壺口縁部片である。復元口径15.6㎝を測る。SK-37埋土より出土した。内外器面共に摩滅のため器面調整は失われている。色調は褐色を呈する。

ｂ．石器（図Ⅶ－７、１～３･６～９･12～14はSC-38埋土中、4 遺構検出、5 SP-17、10･11 SP-27出土）

１は楔形石器である。腰岳産黒曜石の不定形剥片を素材とし、刃部を調整する。重量3.34gを測る。上面に自然面を残す。全長27㎜、全幅20㎜、器厚８㎜を測る。２は剥片石器である。腰岳産黒曜石の縦長剥片を素材とする。全長27㎜、全幅15㎜、器厚６㎜を測る。側面にブランティングを施す。重量1.10gを測る。３は腰岳産黒曜石を用いた剥片石器である。背面に自然面を残した縦長剥片を素材とする。全長37㎜、全幅19㎜、器厚11㎜、重量6.11gを測る。

４はスクレイパーである。遺構検出時に出土した。全長15㎜、全幅30㎜、器厚５㎜、重量1.51gを測る。上面に残る自然面の風化の観察より縄文時代の石器を弥生時代前期に採取し、再加工・再使用した可能性が考えられる。５は腰岳産黒曜石の剥片を素材とした楔形石器である。側面に自然面を残す。全長26㎜、全幅14㎜、器厚10㎜、重量2.78gを測る。６は剥片石器である。上面に自然面が観察でき、側面に刃部を形成する。全長21㎜、全幅13㎜、器厚４㎜、重量1.19gを測る。

7は石鏃未製品である。加工中に先端部・脚部を欠損したため、作業を中断したものと考えられる。



図Ⅶ－６　第203次調査遺物実測図２（S＝１/３）

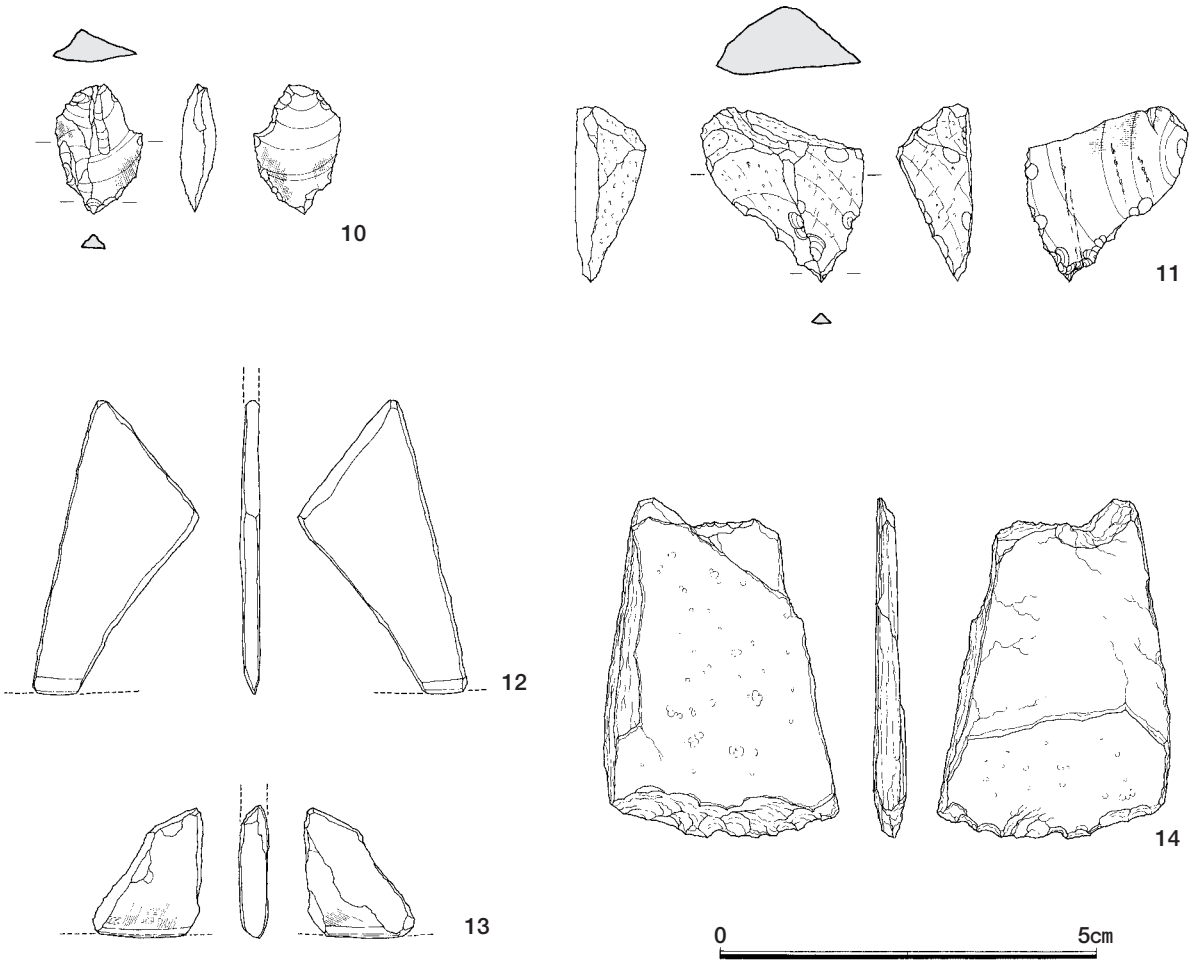
図Ⅶ－７　第203次調査遺物実測図３（S＝１／１）

残存長13㎜、全幅16㎜、器厚４㎜、重量0.67gを測る。８は石鏃である。先端部・脚部を欠損する。残存長17㎜、全幅15㎜、器厚３㎜、重量0.63gを測る。９は石鏃である。先端部・脚部を欠損する。残存長15㎜、全幅15㎜、器厚４㎜、重量0.78gを測る。７～９はいずれも腰岳産黒曜石を素材とする。

10は石錐である。全長16㎜、全幅11㎜、器厚５㎜、重量0.56gを測る。11は石錐である。背面の剥離面は一部風化する。全長23㎜、全幅21㎜、器厚９㎜、重量2.87gを測る。いずれも腰岳産黒曜石を素材とする。

12は石包丁の一部である。石材には粘板岩系のものが使用されており、刃部が形成される。器厚４㎜を測り、重量は6.56gを測る。13は石包丁の一部である。石材には砂岩系の石材が用いられている。刃部付近には擦痕が観察できる。器厚は5㎜を測る。14は板状石製品である。石包丁の一部か。

Tab．１に調査で出土した黒曜石（243点）の分類表を示した。分類と表の作成は福岡市埋蔵文化財課吉留秀敏氏にご協力を得た。出土した石器・剥片は縄文時代後晩期から弥生時代前期に属するものが多く、全体の94％が腰岳産黒曜石である。区画整理によって遺構面を覆う包含層も大きく削平されており、包含層が残存していた状況ならば倍以上の点数の石器・剥片などの遺物が出土したものと考えられる。



図Ⅶ－８　第203次調査遺物実測図４（S＝１/１・１/２）

	腰岳系黒曜石								腰岳以外			
					ツール							計
遺構名	原　石	石　核	剥　片	破　片	石　鏃	スクレイパー	ユーズドフレーク	その他	剥　片	破　片	石　核	
SD-01				3						1		4
SD-02		2	4	7			2			4	1	20
SD-01･SD-02			1	3								4
SP-04				1								1
SK-07		1										1
SP-08			1									1
SP-09				1								1
SP-10			1	1								2
SP-14			1	2								3
SP-15				1								1
SP-17			2	7				くさび形石器1		1		11
SP-18			1									1
SK-23		1										1
SP-25				2								2
SP-26			1	3								4
SP-27				1				ドリル2				3
SP-28			2	7					1			10
SK-30			1									1
SP-34				1								1
SP-36				1								1
SK-37				4								4
SC-38		11	37	66	3(未製品1)		1		6(風化強3)			124
SC-38貼床		1	1	2			1					5
SC-38床面			3	15			1					19
SC-38ベルト							1	くさび形石器1				2
SK-39			1	1								2
SP-41				2								2
SP-42			1									1
遺構検出			1	8		1			1			11
												243

有田遺跡群第203次調査出土石器一覧表

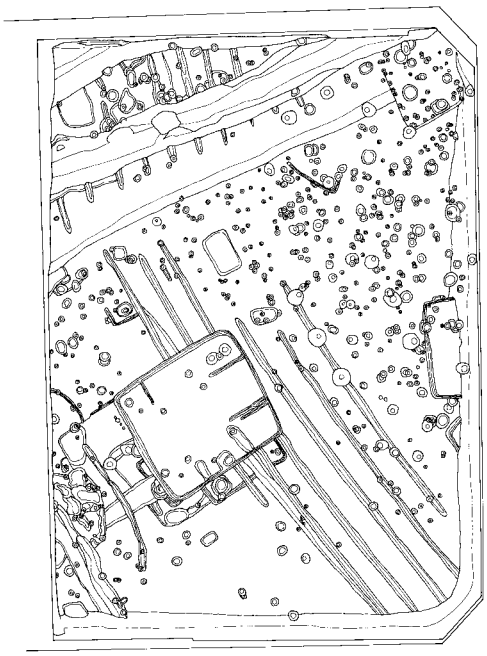
3　まとめ

以上簡単ではあるが、検出遺構と出土遺物についての説明を行ってきた。最後に有田遺跡群第203次調査の簡単なまとめと今後の調査における問題点の指摘を行いたい。

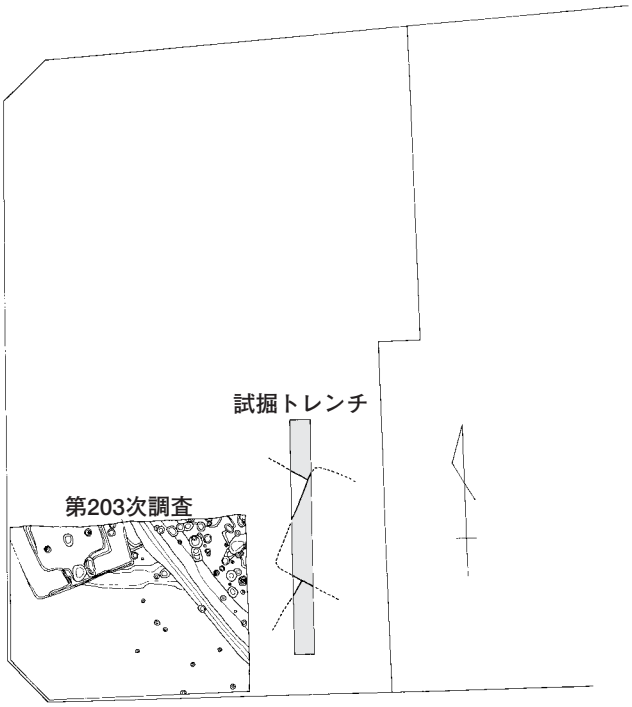
調査区内は、区画整理以後の削平により南側部分で遺構のほとんどが消滅していたが、北側では良好に遺存していた。これまでの調査成果では調査区付近には北側に開く谷地形が存在しており、北側に急激に傾斜した地点と推測されていたが、実際には調査区は緩やかな傾斜面上に位置しており、谷の落ちは更に北側に位置していることが判明した。

検出された遺構は古墳時代の竪穴住居・弥生時代の土坑・近世の区画溝などであり、遺構は検出されなかったが縄文時代後晩期の石器や弥生時代前期の石器なども検出された。近辺で行われた調査成果より調査区一帯に古墳時代の集落が永続的に展開していたことが分かる。(図Ⅶ－９参照)

本調査では調査対象の範囲に入っておらず発掘調査は行っていないが、調査区東側に位置する試掘トレンチでは住居と考えられる遺構が検出されており、調査区北東側にも遺構群が展開していくことが考えられる。

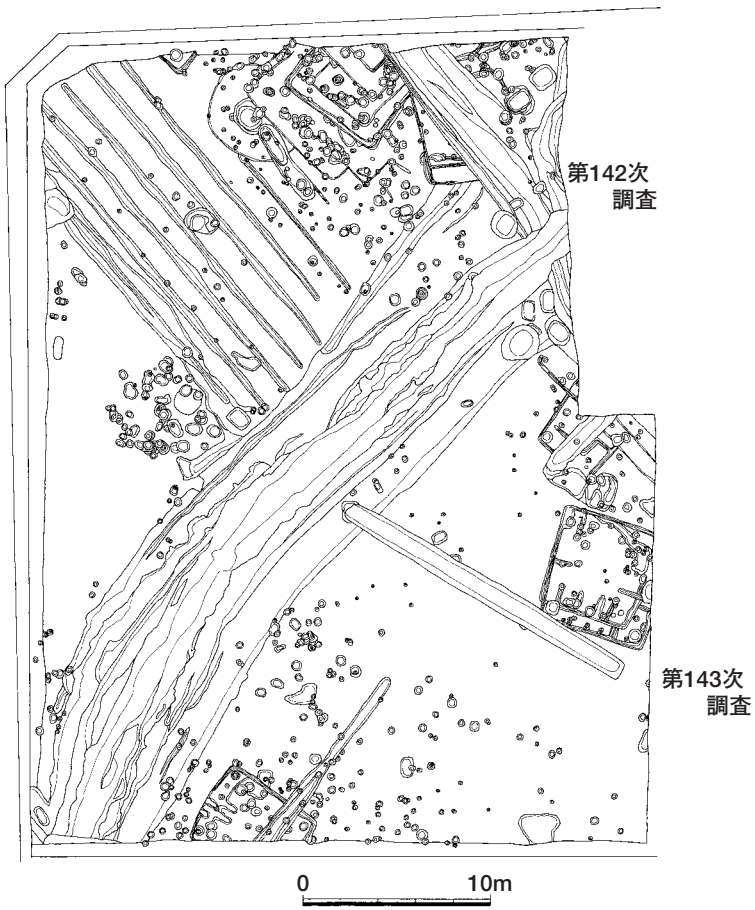


第125次調査



写真Ⅶ－15　第203次調査区表土掘削状況（南から）

写真Ⅶ－16　第203次調査終了後（南から）



図Ⅶ－９　第203次調査区位置図（S＝１/400）

Ⅷ　第204次調査

1　調査区の位置と周辺の調査

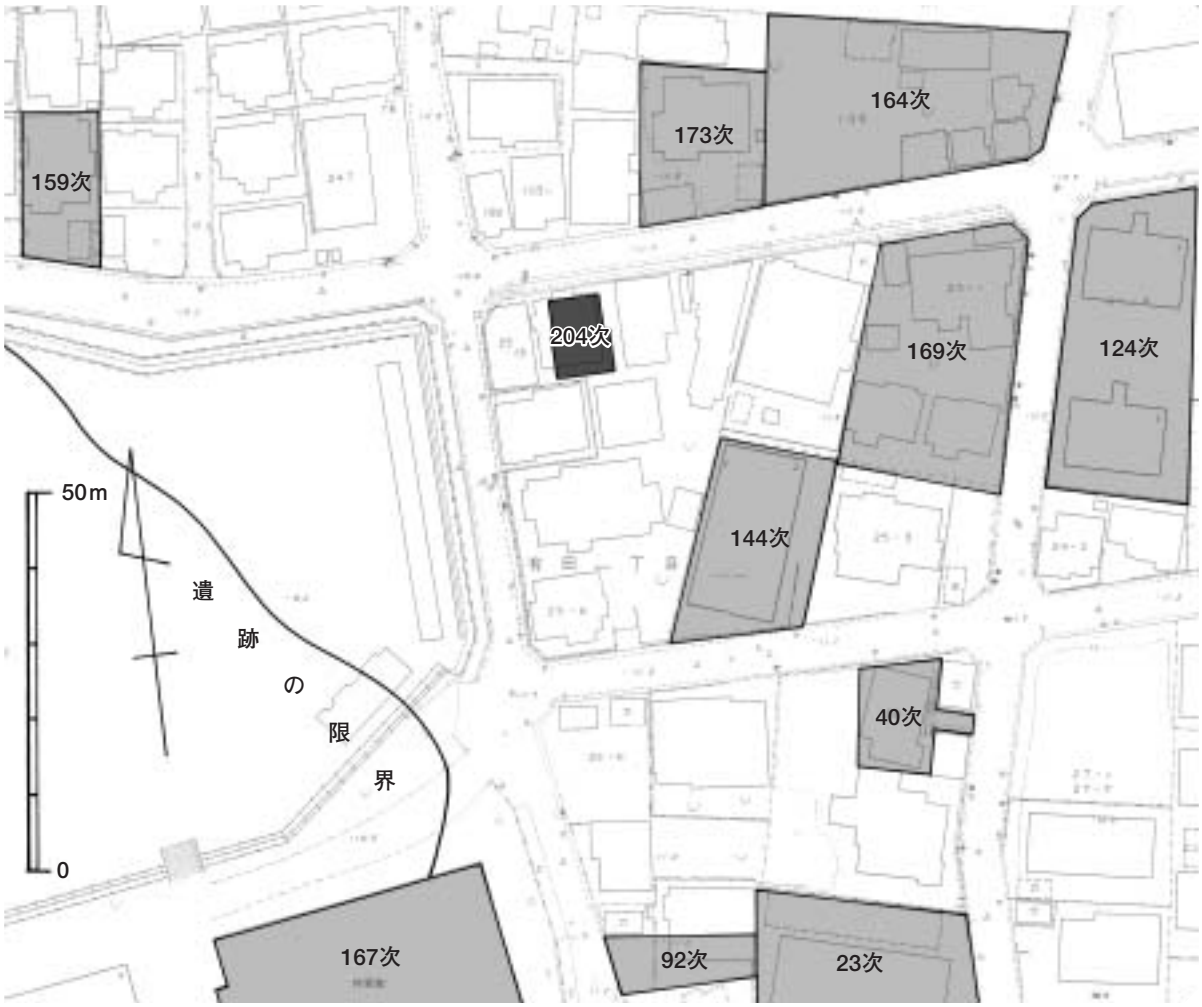
本調査区は早良区有田一丁目25－12、25－13に所在する。有田台地の最高所から約250ｍ程度北に下がった台地が狭くなった地点に位置し、標高約11ｍを測る。本調査区の東側では169次、北東側では173次、164次調査が行われ東西方向の大溝が検出されている。この溝は条里に平行するもので、東から延びてくる官道に伴うものである。

本調査は、石松武氏による店舗兼専用住宅建設に伴い実施したもので、調査期間は平成14年8月19日～同月24日までである。調査面積は73.5㎡である。

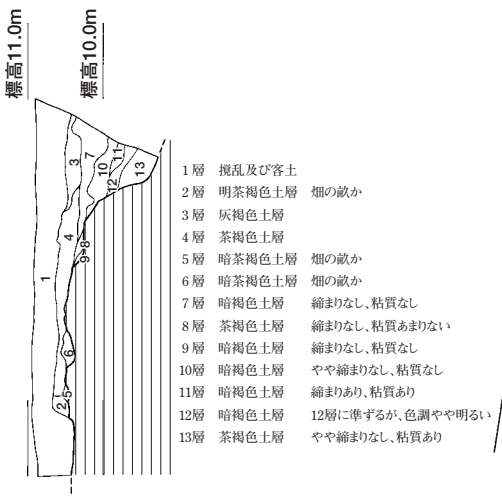
2　調査の記録

（1）　調査の概要

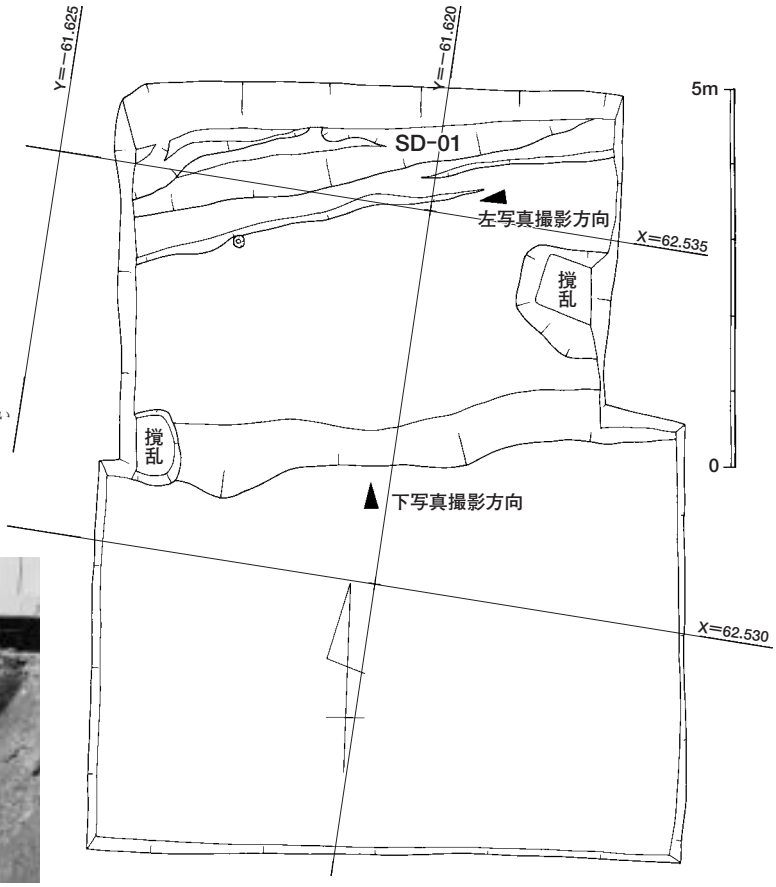
本調査区の遺構検出面は橙褐色ローム（鳥栖ローム）で、現地表下約40㎝で検出した。本調査区は大きく削平を受けているものと考えられ、検出した遺構は中世の溝１条のみである。遺構検出面での標高は、約10.4ｍを測った。



図Ⅷ－１　第204次調査区と周辺の調査区位置図（縮尺１/1,000）



写真Ⅷ－１　第204次調査区西壁土層(東から)



図Ⅷ－2　第204次調査区遺構配置図（右）
及び西壁土層断面図（左上）（1/100）

（2）遺構と遺物

溝（SD）

SD-01（図Ⅷ－2）

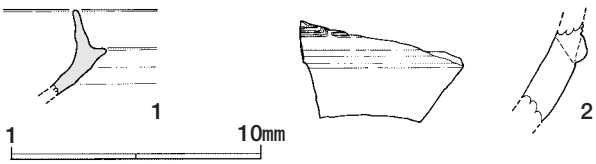
東西方向に走る溝であるが、検出した部分は南側の肩部のみであり全体の様相は不明である。主軸はN－76°－Wを測る。溝の断面は台形状を呈すると考えられ、肩部に犬走り状の浅い段が付く。

検出面から約110㎝の深さまで発掘したが、底は検出していない。

写真Ⅷ－２　第204次調査北半調査区全景（南から）

出土遺物（図Ⅷ－3）

出土遺物は僅少でビニール袋1袋分に満たない。図化に耐えるもの2点を図示したが、この他、須恵器、土師器の細片が数点あるのみである。1は須恵器坏身片で、立ち上がりがやや高い。胎土に白色細砂を含む。色調は灰青色を呈する。2は瓦質土器鉢で突帯が巡り、その上に印文を配する。胎土に白色砂粒・黒色細粒を多く含み、茶褐色を呈する。色調は灰褐色を呈する。



図Ⅷ－3　第204次調査SD-01出土遺物実測図（縮尺1/3）

出土遺物から、遺構の年代は15世紀以降と考えられる。

報告書抄録

ふりがな	ありたこたべ		
書名	有田小田部		
副書名			
巻次	39		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	784		
編著者名	米倉秀紀／本田浩二郎／松浦一之介／藏冨士寛		
編集機関	福岡市教育委員会		
発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	2004年３月31日		
作成法人ＩＤ			
郵便番号	810-8621	電話番号	092-711-4667
ふりがな	ありたいせきぐん		
遺跡名	有田遺跡群		
ふりがな	ふくおかしさわらくありた・こたべ・みなみしょう		
所在地	福岡市早良区有田・小田部・南庄		
所在地コード			
北緯			
東経			

※調査期間・調査面積・調査原因・種別・時代・概要はP1参照

有田・小田部39

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第784集

2004年（平成16年）３月31日

発行　福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神１丁目８の１

印刷　有限会社三陽印刷所